

## 法学者の軽井沢

七戸, 克彦  
九州大学大学院法学研究院 : 教授

<https://doi.org/10.15017/1475347>

---

出版情報 : 法政研究. 81 (3), pp.79-128, 2014-12-17. Hosei Gakkai (Institute for Law and Politics) Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

「法政研究」第八一巻第三号 抜刷  
平成二六年一二月一日 印刷

# 法学者の軽井沢

七戸克彦

# 法学者の軽井沢

- 一 序に代えて
- 二 旧軽井沢と江木衷
- 三 南原と我妻栄
- 四 星野温泉と田中誠二
- 五 結びに代えて

七戸克彦

*Le vent se lève, il faut tenter de vivre.*

Paul VALÉRY

## 一 序に代えて

### (一) 考察の対象

堀辰雄『風立ちぬ』に代表される軽井沢にゆかりの文学作品あるいは文学者について論じた著作を数え上げれば、枚挙に暇がない。一方、政治史の舞台としての軽井沢についても、数多くの論稿が存在する<sup>1)</sup>。だが、これに対して、法学の分野においては、軽井沢と縁の深い法学者について触れた文献は、今日に至るまで、ほとんど存在しないといつてよい。彼らは、どのようなきっかけで、軽井沢で夏を過ごすようになったのか。また、同地での彼らの暮らしぶりは、どのようなものであったのか。

なお、単なる観光ではなく、軽井沢という町を本格的に知りたい人のためのガイドブックとしては、――いずれも一〇年以上前の著作ではあるけれども――、①軽井沢町編『軽井沢文学散歩（改訂新版）』（軽井沢町・軽井沢観光協会、平成一二年）と、②軽井沢散歩の会編『軽井沢散歩24コース』（山川出版社、平成一四年）が、非常に重宝する。①は、昭和四三年の初版以来、実に一二版を重ねた名著である。一方、②の編著者は、長野県の博物館学芸員と高校教諭のグループで、歴史的視点を重視した学術的な内容に仕上がっている<sup>2)</sup>。これらの著述には遠く及ばないが、敬愛する法制史学者・植田信廣教授のご退職に際して、教授を「軽井沢法学散歩」にお誘いしたい。

（二）軽井沢の各地区の位置関係

「散歩」を始めるに際して、これから訪れる軽井沢の各地区の位置関係を確認しておく。

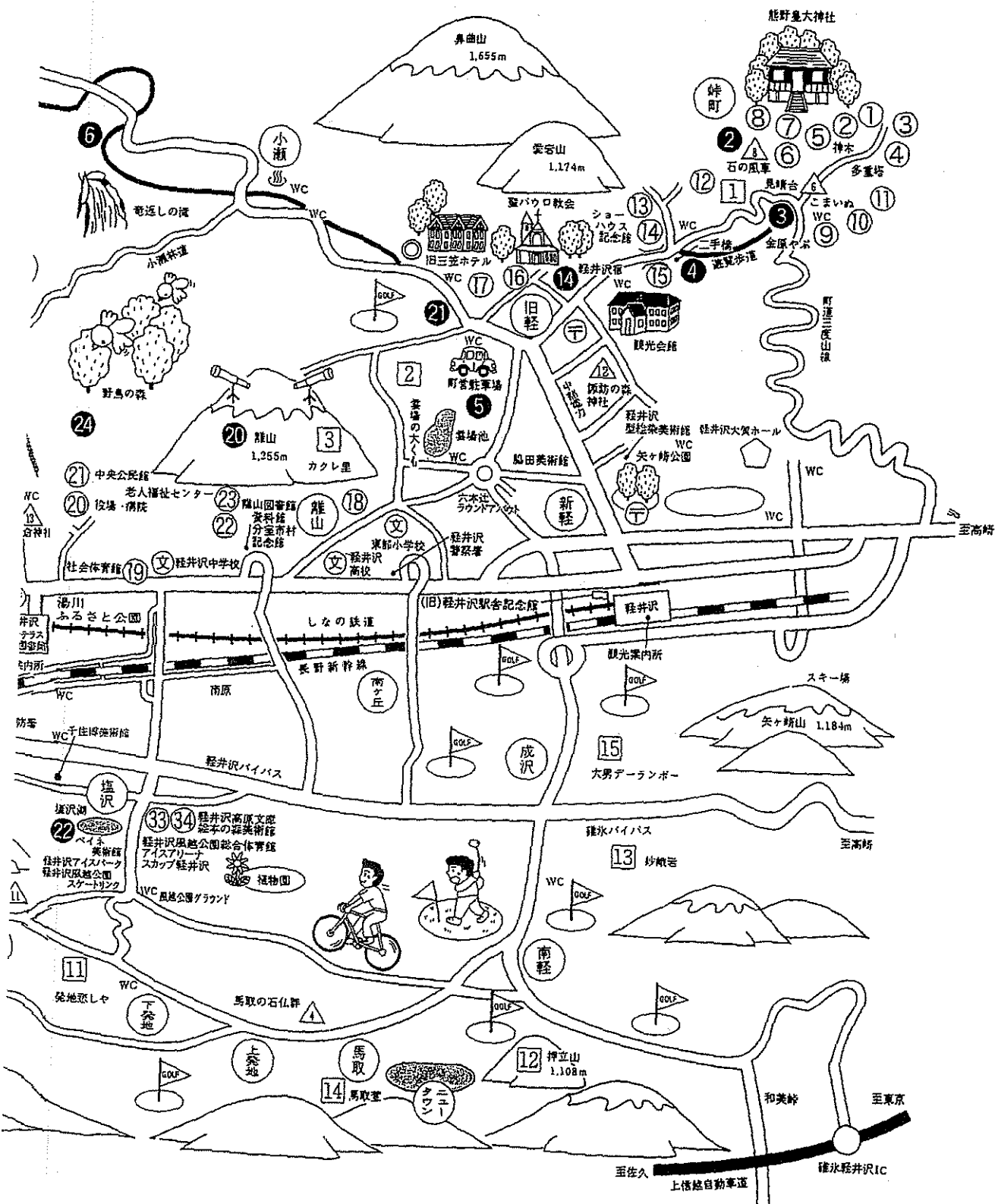
現在の軽井沢町は、中山道（中仙道・木曾街道）六九次（江戸・日本橋と京都・三条大橋を除けば六七宿）のうち、浅間根腰ねこしの三宿（軽井沢宿・沓掛宿・追分宿）が合併してできた町である。

このうちの軽井沢宿が、今日の軽井沢銀座に当たり（後掲【図表1】「町内案内図」⑭）、旧中山道（⑮）は、沓掛宿（⑯）。現・中軽井沢）から離山はなれやま（⑳）。軽井沢駅北口から左方に見えるテーブルマウンテン）の南麓で新道（現・国道一八号線）と分かれ、軽井沢宿（軽井沢銀座）を峠越えの宿として、旧碓氷峠（㉑）に至る。明治中期以降、外国人宣教師の避暑地として発展した地区である。

沓掛宿（⑮）。現在の軽井沢駅前）は、中山道と草津仁礼道にれい（浅間山の東裾を通って草津方面へ抜ける道。現在の国道一四六号線）の分岐として栄えたが、昭和二六年四月二四日の沓掛大火とその後の土地区画整理事業によって、宿場時代の面影を留めていない。これに対して、大正期以降新たに発展したのが、草津仁礼道（現・国道一四六号）を浅間山中に分け入った先の、星野温泉と千ヶ滝せんがたきの別荘地である（㉒―㉓）。

追分宿（⑯）は、中山道と北国街道ほくごくの分岐点（分去れわかき）であったため、江戸時代には浅間三宿の中で最も栄えていたが、明治期以降は、旧軽井沢・中軽井沢の別荘地開発から取り残された。しかし、本陣旅館や脇本陣の油屋旅館が、帝大生の期末試験や高等文官試験の勉強のための宿として知られ、また、油屋旅館を定宿とした堀辰雄が、後年旧軽井沢から居を移すなどして、学生と文士に好まれる静かで落ち着いた町というイメージが定着した。<sup>③</sup>

# 町内案内図





## 二 旧軽井沢と江木衷

## (一) 明治中期——外国人避暑地の形成

明治一七年碓氷新道の開通により宿場町としての使命を終えた軽井沢宿を、外国人向けの避暑地へと発展させた功勞者は、イギリス人聖公会宣教師シヨール<sup>①</sup>と、東京大学(旧制)文学部講師デイクソン<sup>②</sup>である。二人は、明治一八年八月に始めて訪れた軽井沢を気に入り、翌明治一九年には、ともに家族を伴って軽井沢宿に滞在(シヨールは高林薫平の居宅、デイクソンは亀屋旅館主人・佐藤万平の居宅を借りた)、明治二〇年には友人十数人を誘って避暑に訪れ、シヨールは、明治二一年に、つるや(軽井沢宿東端の枳形茶屋から旅館業に転ずる)主人・佐藤忠右衛門の斡旋で、矢ヶ崎の旅宿を大塚山<sup>③</sup>に移築する。外国人による別荘建築の第一号である(後掲【図表4】東4番)。なお、『軽井沢町誌』によれば、同年には、デイクソンも、佐藤万平宅地内に別荘を建てたとされているが<sup>④</sup>、実際には、佐藤万平宅地内の離れ家を一夏一二円で賃借したものらしい<sup>⑤</sup>。その後、二人の誘いを受けて、続々と外国人が軽井沢を訪れるようになり、他方、佐藤万平も、明治二七年、亀屋旅館を外国人向けのホテルに改装する(なお、名称は当初「亀屋」ホテルであったが、二年後の明治二九年、外国人が発音しやすい「万平」ホテルに改称した。それゆえ、現在の万平ホテル・アルプス館のステンドグラスは亀の意匠になっている)。だが、その間の明治二五年にデイクソンは妻の実家のあるアメリカに渡つてしまい、さらに、明治四一年軽井沢聖公会(シヨールが明治二八年に設立した軽井沢最初の教会)の前庭に「シヨール氏記念之碑」が建立されたことで、避暑地・軽井沢の紹介者としての榮譽は、シヨールが独占することとなる。

一方、シヨールとデイクソンが軽井沢を訪れる二年前——明治一六年には、東京大学(旧制)法学部講師ラートゲン<sup>⑥</sup>が、「内国旅行の途次、この地の風土の泰西的なるを愛でて一カ月間三度屋(佐藤又八)に滞在」したとされる<sup>⑦</sup>。三度



屋は、旧軽井沢宿の脇本陣の一つであるが、廃業時期等については調べていない。

その後、ドイツ人では、日露戦争ただ中の明治三七年九月一六・一七・一八日の三日間、ベルツが草津温泉行き<sup>10</sup>の途上、軽井沢の「ホテル」に宿泊している（三一年間に及ぶ日本滞在を終えて帰国する一年前のことである<sup>11</sup>）。当時の軽井沢の「ホテル」といえば、前記明治二七年開業の万平ホテルか、旧軽井沢宿本陣の佐藤熊六が明治三三年に開業した軽井沢ホテルが思い浮かぶが、『ベルツの日記』には「たった十人の客しかないホテル」とあるだけで、ホテル名の記載はない<sup>13</sup>。軽井沢から草津へ抜ける道筋を、ベルツは何度も通っているが<sup>14</sup>、しかし、軽井沢での滞在は、このときがはじめてのようである。興味深いのは、同地の外国人避暑客に対する彼の批判的な感想である。彼の日記をそのまま引用すれば――、

軽井沢は、気候の乾燥した点で知られており、夏は外人が多数訪れる。主としてアングロ・サクソン系の新教伝道者で、めんどろな仕事の労苦を、ここで三カ月間滞在していやさねばならないそうだ。だがしかし、信者たちは下界で汗を流して、日ごろの精神的慰安で満足することを考えておればよいのだ。これだから自分は、かれら宣教師連に好意がもてないのであつて、自身には何一つとして犠牲を課することなく、教えに従わずして貧をいとい、高原に別荘を構えてスポーツにふけり、あらゆる点で紳士にひけをとるまいと努めているのだ。かれらの報告書を読むと、その奮闘努力振りや、毎年の夏期休養の痛切に必要な事情が、最も効果的に書立ててある。それならば、何故カトリックの宣教師たちは、こんな休養を必要としないのだろうか？ 何が一体この人たちに、年々歳々うま<sup>15</sup>ず、たゆまず働き続けて、しかもはるかに困苦欠乏に満ちた生活を送る力を与えているのだ？ ……〔中略〕…。しかるに新教の伝道師たちはこの軽井沢で、オルガンを鳴らしてお祈りをし、会議を開いてはこれを宣伝的に新聞紙に載せ、ここにおつても伝道者としてキリスト教徒として活動しているのだぞと、広告している。しかし誰だって、かれらに心服させられるものはないし、いわんや神様が、こんな茶番狂言でだまされるはずはない。

当時の外国人避暑客の国籍別分布は、【図表2】のようなものである<sup>15)</sup>。つまり、軽井沢は、ベルツも述べるように、外国人の中でも、新教徒（プロテスタント）のイギリス人およびアメリカ人の避暑地として形成されたものであった。

【図表2】 明治後期における軽井沢外国人避暑客の国籍別分布

	明治39	明治40	明治41	明治42	明治43	明治44
英	401	285	382	496	352	467
米	337	361	477	542	548	638
独	74	10	7	50	8	41
仏	5	15	5	13	5	4
清	3	17	22	23	13	14
露	-	8	6	1	2	3
伊	-	2	-	2	-	-
和	11	4	2	-	1	-
奥	3	2	8	1	5	3
瑞	6	8	2	19	17	8
諾	2	8	2	-	1	-
印	-	2	1	4	-	-
丁	-	-	-	5	5	2
葡	-	-	-	2	-	-
希	-	-	-	1	-	-
白	-	2	3	6	-	2
西	-	-	1	-	-	5
土	-	-	2	-	-	-
韓	3	1	4	7	-	-
伯	-	-	-	-	-	4
智	-	-	-	-	3	-
計	852	725	924	1172	960	1191

(二) 明治後期——日本人の参入

上記のような経緯でアングロ・サクソン系の新教宣教師たちのコロニーとなった旧軽井沢に、日本人ではじめて別荘を構えたのは、明治二六年、当時海軍大佐であった八田裕二（次）郎<sup>16)</sup>とされている（旧軽井沢宿の西端南（後掲）【図表4】南9番）。なお、建物は今日も現存している。長期の海外生活のため、日本の高温多湿の風土に馴染まなかったの

か、頭痛やノイローゼに悩まされ、高原療養の地として軽井沢を選んだもので、その後、健康を回復した彼は、「軽井沢は健康地でありスイスのモンブラン付近に勝る避暑地である」と上流階級に紹介し、それが日本のエスタブリッシュメントによる別荘建築のきっかけになった、といわれる。<sup>(17)</sup>

ただし、右の定説に関しては、以下の二点が気になる。

第一は、軽井沢の別荘に滞在した最初の日本人であって、読売新聞明治三十二年七月一三日朝刊には「○陸軍次官の避暑 桂同次官にハ避暑の為め一昨十一日信州軽井沢へ赴かれたり」とあり、八月一日朝刊にも「○桂陸軍次官 同次官にハ昨三十一日出発中仙道軽井沢の別荘へ赴かれたり」とある。「桂陸軍次官」とは、後に首相まで昇る桂太郎<sup>(18)</sup>であるが、このとき彼が滞在した「別荘」の詳細については、未調査である。

第二は、軽井沢の魅力を日本の上流階級に流布した功労者は誰か、という点である。八田裕二郎に続いて日本人が二番目・三番目の別荘を建築したのはいずれも明治三十一年、二番目の別荘は、時の逓信大臣・末松謙澄<sup>(19)</sup>が川越石川（矢ヶ崎川）沿いに建てた「泉源亭」で（【図表4】東90番（東10番……東334番）。旧街道南側の現在の太宮橋付近）、<sup>(20)</sup>三番目の別荘は、碓氷峠のアプト式鉄道敷設工事を請け負った鹿島組（現・鹿島建設）の鹿島岩蔵<sup>(21)</sup>が、宿場の西方、精進場の長野県種育場跡地を購入して（現在の鹿島の森）建築したものである（【図表4】西無番。西5番・6番・8番・9番・10番に囲まれて「鹿島岩蔵」とある場所）。<sup>(22)</sup>さらに、翌明治三十二年には、三井三郎助（高景）<sup>(23)</sup>が、草津新道（旧軽井沢宿西端から北方に向かって草津方面へ抜ける道。現・三笠通り）愛宕山（三笠山）の西南麓に別荘を建築している（【図表4】北無番（旧軽井沢134番）……北18番の上）。<sup>(24)</sup>彼らが軽井沢に関する情報を入手した経路は一様ではない。他方、彼らもまた、八田裕二郎と同様、彼らそれぞれに固有の人脈を用いて軽井沢の魅力を紹介したことが、それまで外国人に独占されてきた同地に日本人が滞在するようになる契機となった。要するに、外国人の間に避暑地・軽井沢の名が広がった経路が単一（ショーとディクソン起源）であるのに対して、日本人の間の情報伝達経路については、多種多

様ということである。

なお、法律家ではじめて軽井沢に別荘を構えたのは、明治三六年、精進場（現在の鹿島の森）の江木衷<sup>25</sup>である（後掲【図表4】西無番〔精進場520番〕……のち542番）。彼がどこから避暑地・軽井沢に関する情報を仕入れたのかについては資料を発見できていないが、別荘での暮らしぶりは、『かるるざわ』によれば、次のようなものであった。<sup>26</sup>

△江木冷灰博士の別荘。

町の西方の郊外にあり、邸内には雲場川の清流を導き、流に望んで数棟なる清洒なる庵を結び、遠近の山荘と称ふ。長き夏の日、こゝに暑さを避くる冷灰博士夫妻の悠遊は、転世人羨望する処。浅岳に懸る雲なく、噴煙直上し、雲場の原の草花咲き乱れて、霞に匂ふ日、博士は窓深く籠めて読書三昧に入り、夫人は驛馬に鞭打って山野を駆け。雲低く垂れて涼風簾を巻く夕、夫人は博士の傍に侍して、縁辺を遶る流水、草叢にすだく蟋蟀と弾琴を競ふと聞く。

一方、江木衷もまた、軽井沢の魅力の伝道者であったことは、彼の書簡からも見て取れる。別荘を建てた明治三六年八月二五日付、郷里・岩国の漢学塾の旧師・南方一枝に宛てた手紙には、次のよう<sup>27</sup>にあり、

暑気の候御起居如何定めて御壮栄と奉察候、生儀本月二日より避暑の爲め当軽井沢に滞在仕候、昨今は殊に冷氣にて朝夕はドテラを要し候、他の避暑地と違ひ滞在者は概ね外国人にて七百人も有之由にて風俗も宜敷極めて閑静に御座候、先日東京の同人等一寸来訪し多少の唱酬も有之候が石埭の「夜擁地爐同話詩」の句も全然事実<sup>28</sup>に有之拙作の「鶯聲午引三春夢、麥浪寒生八月天」も全く此地の新月令にて「ホラ」には無之候、ドーカ先生の御一游をと思ひ候得共致方無之次第に候

翌明治三七年六月念二（二二日）付の南方一枝宛の書簡にも、次のよう<sup>28</sup>にある。

其後御無沙汰平に御海容奉願候、陳者追々暑気の候と相成軽井沢山中避暑の準備に取掛候間何卒額面御揮毫相願

申候、可相成は一記文御起草を賜はり候はゞ大幸に有之候に付為御参考同地の概勝申上候、同地は有名なる臼井〔碓氷〕嶺を上りつめたる処にて海面を抜くこと三千二百七十尺盛暑の候にても夜中は焚火仕位に冷氣に有之、浅間山を眼下にひかへ朝夕噴烟を望み候、日本人の別荘は僅々に候得共外国人の別荘は極めて多く外国風のホテルは三軒も有之、夏は七八百人も入込全然外国の田舎に有之申候、同処は旧時遠近おちこちの里と申候故遠近山荘と總名を命申候、荘は小河を園内に囲み兩岸に草堂を設け候ものに有之候、東京より汽車の便あり六時間にて着仕候、先生の御来臨願はしく存候得共何分にも遠路の事無理には申兼候得共、外国人は長崎辺よりも来候事一憤発あらせられては如何右御願迄 草々

さらに、彼の兄・江木千之(29)によれば、「彼〔弟・衷〕は軽井沢の草分けとも云はるゝほど早くから、同地に別墅を構へて居つたが、吾独り悠々自適するに忍びずとて、其邸内の林間に、特に予に適合すべき、殊に片足の自由を缺ける予の入浴の便なるべき特別の浴室までも具備したる、離れ家を設けてくれたのであった(30)。同地を愛した江木衷の著作には「軽井沢の避暑中に起稿したものが少なくない」が、(31)軽井沢の魅力は、当初は、このような近親者等に対する口コミで広がっていったものである。

江木衷の別荘建築の翌明治三七年には、青山胤通(32)〔図表4〕北無番……のち664番）、佐々木政吉(33)（西無番。「江木博士のそれと相對する」場所のようであるが、(34)〔図表4〕には記載がない）が、明治二八年には新渡戸稻造(35)〔図表4〕西12番）が別荘を建て、別荘の数は、明治三九年には一〇二戸、明治四四年には一七五戸にまで増加した。

ここで、後掲【図表4】「明治四四年（一九一一年）軽井沢別荘案内地図」について説明しておく、同地図は軽井沢町立書図書館所蔵（離山図書館二階キャビネット最上段に収蔵されている）、表題は整理のため貼付された付箋の記載を転記したが、地図そのものの下部には「明治四四年頃 別荘分布図 原図 佐藤不二男氏」とある。佐藤不二男は、ショーに別荘を斡旋した佐藤忠右衛門のつるや旅館の次代当主で、戦後、軽井沢町長も務めた人である。(36)

一方、『輕井沢町誌』「年表」の明治四四年の項には「別荘分布図」できる。東・西・南・北の別荘番号を改正し一番から六八〇番まで、外国人別荘一三五戸・日本人別荘四〇戸とある。<sup>(37)</sup>【図表4】の□印の別荘番号が、改正後の新しい別荘番号である。これに対して、■印の別荘番号は、改正前の古い別荘番号で、東・西・南・北のそれぞれに独立した番号が付されている（日本人別荘は少数であるため、無番の場合も多い）。<sup>(38)</sup>東区（East Part）は、旧輕井沢宿の中山道より南、テニスコートより東の地区、北区（North Part）は、旧輕井沢宿の中山道より北の地区であって、両地区の別荘所有者は外国人で占められている（なお、三井三郎助や青山胤通の別荘は北区に属するが、外国人別荘群からは外れている）。南区（South Part）は、旧中山道より南、テニスコートより西の地区であり、八田裕二郎の別荘は、その西の外れに位置する。以上に対して、西区（West Part）——旧輕井沢宿の西端よりも西の

【図表3】 輕井沢郵便局最初の電話加入者（明治四三年八月一日）

輕井沢特設電話交換加入者名及番號表

輕井沢郵便局 長野縣北佐久郡東長倉村

本局に所用の節は左記事務の区別に依り承会せられたし

- 六〇 電話交換の媒介、電話呼出の受付、電話機（電話線の不良障碍等試験に関する事務）
- 七五 加入者の電報送受用
- 九五 一般業務用

特設電話交換加入者名及番號（八月一日開通）

番号	加入者	氏名	機械	設置場所	職業
一	青木商店	青木今朝吉	輕井沢内新輕井沢一三〇	穀類雜貨商	
二	川村	一之助 全	新輕井沢三九ノ一	魚類雜貨商 新聞取次商	
三	桂	太郎 全	離	山	
四	輕井沢警察分署	全	新輕井沢		
五	江木	衷 法学博士 全	精進場五二〇		
六	山六出張店	山本六五郎 全	旧輕井沢五五八	果実蔬菜商	
七	綿	屋泉喜太郎 全	旧輕井沢二二	製氷業	

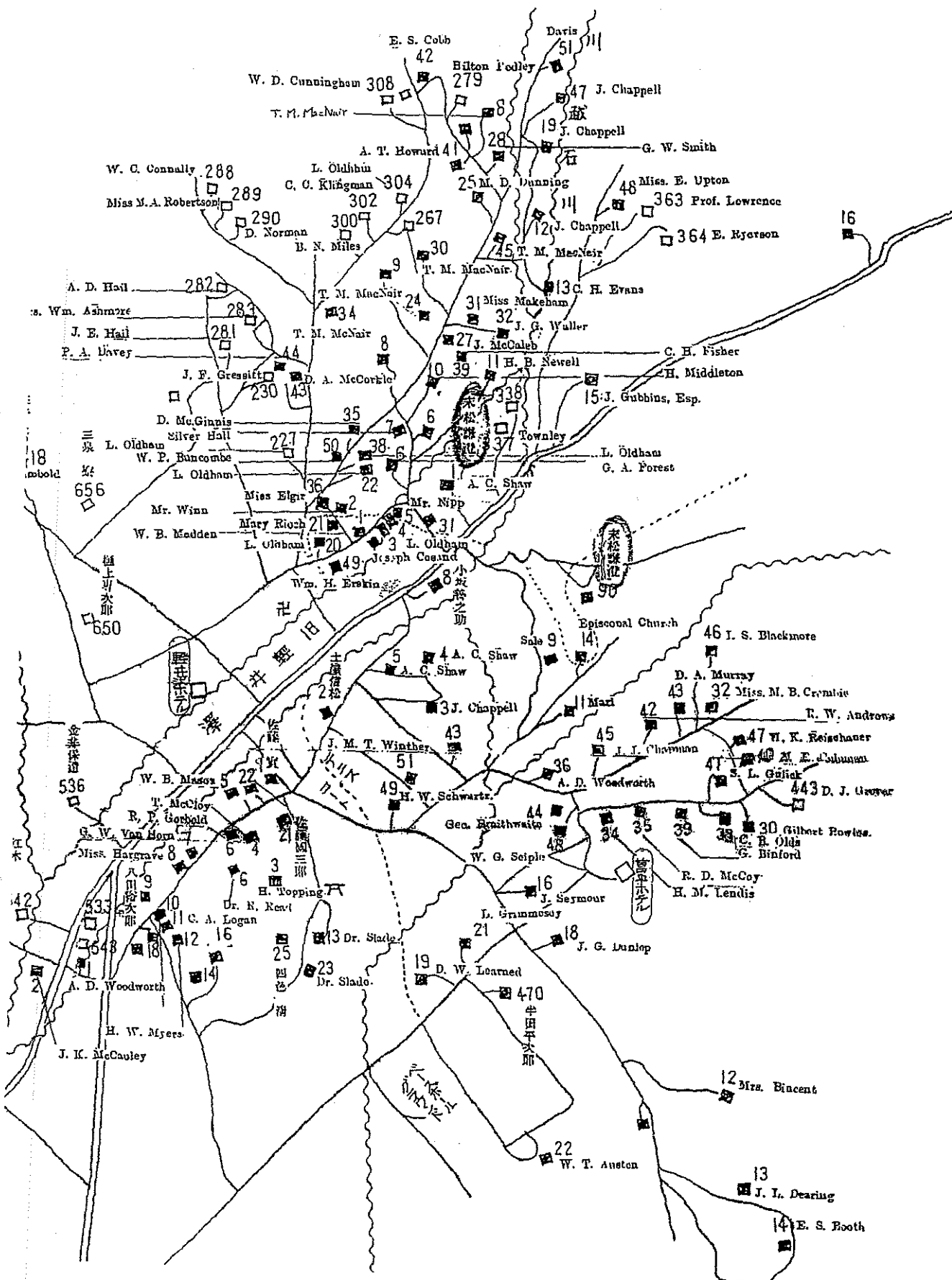
地域——には、外国人別荘は（雲場池付近を除けば）ほとんど存在しない。この地域は、鹿島の森に代表されるように、日本人によって開発された新しい地域であり、要するに、この時代の日本人は、旧軽井沢宿の外国人コロニーの中には立ち入らなかつたのである。

その後の日本人別荘も、旧中山道を沓掛（中軽井沢）方向へ向かつて西へ西へと（＝離山の東麓から南麓の方向へと）新たに別荘地を開発する方法で増加してゆく。その嚆矢は、第二次桂内閣時代の明治四三年七月二六日、離山南麓の鉄道線路の南に別荘を建築した桂太郎である。

なお、【図表4】の別荘番号の変更が行われる一年前（明治四三年）桂首相の別荘完成直後の八月一日には、軽井沢郵便局で電話交換が開始された。加入者は二二名。軽井沢歴史民俗博物館所蔵の「加入者名及番号表」の記載を転記すれば、【図表3】のごとくである。<sup>39)</sup> ここでもやはり、江木衷の電話所有が目を惹く。

八三	井三郎 助全	旧軽井沢一三四二
九	軽井沢共同製水所 全	新軽井沢一一九 製水業
一〇	江戸屋 <small>佐藤愛三郎</small> 全	旧軽井沢六九 牛肉商
一一	白木屋 <small>土屋保造</small> 全	旧軽井沢八〇 牛乳搾取業
一二	軽井沢停車場 全	新軽井沢
一三	油屋 <small>小川三郎</small> 全	新軽井沢一二八 旅館
一四	三澤屋 <small>上原九市</small> 全	旧軽井沢五六 果実蔬菜業
一五	三笠ホテル <small>山本長良</small> 全	西山一三三七 旅館
一六	田丸屋 <small>土屋富太郎</small> 全	旧軽井沢五二 穀類雜貨商
一七	エル、グルミセー 全	櫻ノ沢一七番
一八	<small>内國通運株式会社 取引店</small> 土屋源一郎 全	新軽井沢一一七八 運送受負業
一九	山屋 <small>袖山萬藏</small> 全	新軽井沢一二九五 <small>柄色菓子 製造業</small>
二〇	軽井沢ホテル株式会社 全	旧軽井沢六一 旅館
二一	樋上專治郎 全	新軽井沢一八二ノ一
二二	万平ホテル <small>佐藤國三郎</small> 全	櫻ノ沢六八 旅館

長野逓信管理局







## (三) 大正期——新別荘地の開発

明治期においてロコミで広まった軽井沢の魅力は、大正期に入ると、メディアを通じて大々的に流布されるようになる。当時のガイドブックとして著名なのは、大正元年、軽井沢在住の佐藤孝一によって編まれた『かるゐざわ』であるが、<sup>(40)</sup> 広く一般に影響を与えたのは、新聞各紙による軽井沢の紹介記事であったろう。

たとえば東京朝日新聞は、大正二年七月二六日朝刊「軽井沢より」で軽井沢の魅力を伝え（記事には「目下の避暑客は外人五百五十人、内国人六百人、合せて千百五十人、内国人の重なるものは尾崎行雄、江木衷及び夫人、新渡戸夫人、外人は大抵日本に来て居る宣教師である、今頃は疾<sup>まじ</sup>に開いて居る筈の離山山下の桂公の別荘の門も公が病氣中なので閉ぢたまゝである」とある）、また、同年（大正二年）八月二四日・二五日・二六日朝刊は、杉村楚人冠<sup>(41)</sup>「カルキザハ（上）（中）（下）」を掲載している。この連載記事は、楚人冠が望月小太郎<sup>(42)</sup>の新築別荘に逗留した際の紀行文であるが、別荘開きの際の客の顔ぶれは、次のようなものであった（「カルキザハ（下）」）。

此夜は別荘開きの祝を兼ねて、僕を此地の社交界（！）に引合わせよう為の小宴が望月「小太郎」君の宅で開かれた

六時半といふ案内に、先づ岡崎「正也？」弁護士が見える、引続いて八田「裕二郎」代議士が来る、やがて尾崎行雄君乗馬服の姿勇ましく、のツしくと例の足取でやって来ると、今度は奥さんの欣々「江木栄子」女史を引添って、江木衷博士ぞろりと黒い羽織を着流して懐手をしながら御入ある、最後に元氣のい、藤島「太麻夫？」ドクトルとつかはと入って来て之で役者は揃った、之に青山「胤通」、佐々木「政吉」、新渡戸「稻造」の三博士を加ふれば軽井沢の名士は出揃ふのださうだが、見た所腹の空虚な俗悪極まる成金式の男が一人も居合わせぬ所は頗る人意を強うするに足る

尾崎行雄<sup>(43)</sup>の軽井沢滞在は、神経衰弱の高山療法の適地として、明治三九年に結婚した妻テオドラ（英子）の勧めによるもので<sup>(44)</sup>、大正三年（上記杉村楚人冠の記事の翌年）に自身の別荘（莫哀山荘）を所有するまでは、宣教師で明治学院教師のセオドア・マクネアの別荘を借りていた<sup>(45)</sup>。

なお、尾崎の莫哀山荘（「哀しみの莫<sup>な</sup>」(sans souci)「山荘の意」）は、旧軽井沢宿から碓氷峠へ向かう登り口の街道南側に、約五万平方メートルもの広大な敷地を有する豪邸であったが<sup>(46)</sup>、それより先——すなわち、旧軽井沢宿の東端である二手橋<sup>(てはし)</sup>（前掲【図表1】④）より東の地区（峠町）は、旧碓氷峠（【図表1】②）の急峻な地形のため、別荘地に適さない。もともと、『軽井沢町誌』「年表」昭和八年の項には「峠町、夏期学生の修養、各校受験生も準備のため滞在する者多し」とある<sup>(47)</sup>。すでに大正期以前より、旧碓氷峠は、学生の勉強場所として定着していたようで、大正五年には、末川博<sup>(48)</sup>も同地に籠もって高等文官試験の勉強に励んでいる<sup>(49)</sup>。

他方、旧軽井沢宿の中心部の土地は、外国人によって先占されていたため、日本人は、主として宿場の西側に別荘地を求めていたが、大正期になると、旧軽井沢宿の外部における新たな別荘地開発が活発化してくる<sup>(50)</sup>。宿場の西側では、大正二年には後藤新平<sup>(51)</sup>が四万五〇〇〇坪の土地を買収し、翌大正三年から四年には、横浜の貿易商・野沢組二代目・野沢源次郎<sup>(52)</sup>が、「男爵芋」の川田龍吉<sup>(53)</sup>が経営していた農場および牧場（【図表4】西560番「川田牧場」・西564番「川田男爵」参照）を譲り受けて（かつて雲場原と呼ばれ、その後は野沢原と呼ばれるようになる、旧軽井沢宿西から沓掛宿（中軽井沢）に至る旧中山道沿い、離山東麓・南麓一帯の広大な土地である）、大規模な別荘地開発を行い、大正五年には徳川慶久<sup>(54)</sup>・細川護立<sup>(55)</sup>、大正六年には大隈重信<sup>(56)</sup>、大正七年には加藤高明<sup>(57)</sup>、大正八年には津軽承昭<sup>(58)</sup>の別荘が完成し、大正一五年には近衛文麿<sup>(59)</sup>も大正七年築の別荘を購入した（現在の近衛レーンではなく軽井沢駅に近い場所にあった旧別荘）。このほか、年代については調べきれないが、鳩山秀夫<sup>(60)</sup>も別荘を建築している（後記大正七年「軽井沢夏期大学」講師の頃か。なお、彼は、大正一五年に東京帝国大学を退官し弁護士に転じている）。

一方、このようにして野沢源次郎の分譲地に別荘を構えた上流階級の歴々は、大正九年、徳川慶久を会長とする軽井沢ゴルフ倶楽部を設立して、大正十一年（旧）ゴルフ場を完成させる。現在は鹿島建設の所有となつている鹿島の森のゴルフ場である。しかし、このコースには九ホールしか存在しないため、軽井沢ゴルフ倶楽部は、昭和五年、鉄道線路の南側の土地を取得し、一八ホールの新ゴルフ場を建設することとした。事業計画は、「財団法人南ヶ丘会」を設立して、取得した五六万坪の土地をゴルフ場区域と別荘地区域に分け、別荘地を売却した代金を土地の取得費用と新ゴルフ場の建設費に充てる、というもので、事業の発起人には、細川護立・近衛文麿らのほか、鳩山秀夫も名を連ねている。ちなみに、鳩山のゴルフは、昭和三年一月六日東京・駒沢ゴルフ場で開催された原嘉道<sup>(61)</sup>司法大臣寄贈ゴルフ優勝カップ争奪戦で優勝するほどの腕前である<sup>(62)</sup>。

分譲された別荘地は、財団法人の名称にちなんで「南ヶ丘」と名づけられたが、その購入者の中には、鳩山秀夫の東京帝国大学時代の同僚がいた。彼の概念法学を手厳しく批判し、東大教授を辞するところまで追い詰めた、義理の弟・末弘厳太郎<sup>(63)</sup>である。

### 三 南原と我妻栄

#### (一) 南ヶ丘と末弘厳太郎

我妻栄は、昭和三八年ジュリスト二六九号掲載「軽井沢の道路」で、軽井沢に別荘を所有していた東大教授として、小野塚喜平次<sup>(64)</sup>・河合栄治郎<sup>(65)</sup>とともに、末弘厳太郎の名を挙げている<sup>(66)</sup>。

小野塚先生は、軽井沢を愛し、夏は散歩と思索に日を送られたと伝えられている。その散歩道は、今は危険で、

散歩どころではない。末弘先生は、新設されたゴルフリンクの傍、電灯線も引いてないところに先生独特の設計の小屋を作って、早朝からゴルフの練習をされた。その小屋は、今も残っているようだが、交通の頻繁になった周囲の有様には、昔をしのぶよすがもない。河合栄治郎さんは、思索、散歩、執筆と時計のように正確な日課をくり返しながら、トーマス・ヒル・グリーンの研究に没頭された、と話に聞いたが、今日の軽井沢では、思索に適する散歩道を探すことは困難だ。

だが、末弘の妻・冬子によれば、末弘が軽井沢に別荘を建築した経緯は、次のようなものであったという。<sup>67</sup>

我妻　ゴルフを始めると軽井沢にゴルフマンのような家をつくってみたりされるところをみると、見ようによっては贅沢だという気がする。

末弘夫人　あれは半分私が建てたので……。軽井沢はゴルフ場から来たのじゃなくて、夏期大学か何かで家をつくってくれたのが初めてですよ。

我妻　家の方がゴルフより先ですか。

末弘夫人　行ってみたら目の下にゴルフ場があるので、始めたのです。

我妻　そうですか、私はゴルフ場のためにつくったのかと思っただけでも……。

「夏期〔夏季〕大学」とは、大正期以降、成人の社会教育運動の一環として全国各地で行われていたもので、通俗大学会を組織した後藤新平と、これに共鳴する新渡戸稲造らの支援の下に、軽井沢では、大正七年より昭和九年までの計一六回開講された。<sup>68</sup> 大正七年（第一回）の講師には、新渡戸稲造のほか、市川三喜、<sup>69</sup> 鳩山秀夫、<sup>70</sup> 森戸辰男、河合栄治郎らが名を連ねる。講師陣に末弘厳太郎の名が認められるのは、彼が留学から帰国した翌年の大正一〇年（第四回）から大正一二年（第六回）までの計三回で、講義内容は、大正一〇年（第四回）は「法律と法学との関係」、大正一一年（第五回）は「労働法制」、大正一二年（第六回）は「労働法制における諸問題」である。<sup>71</sup>

一方、施設に関しては、野沢源次郎が、南原の土地一万坪を提供し、洋式講堂と寄宿舎四棟を新築して寄付したが、<sup>(2)</sup>しかし、新ゴルフ場の完成は昭和八年（七月一日）のことなので、「行ってみたら目の下にゴルフ場があるので」との末弘夫人の言は、つじつまが合わない。

他方、末弘自身の言を拾えば、読売新聞大正一五年七月九日朝刊「今は老いても昔は選手・四）帝大の末弘殿太郎博士」には「此の頃はスキーやゴルフに凝ってゴルフだけは稍ものにし軽井沢あたりで素人を相手に盛んにクラブを振り廻すが去年軽井沢での選手権をとつてからといふものゴルフで夢中である」とあり（ちなみに、この時代の軽井沢のゴルフ場は前記旧ゴルフ場しかない）、東京朝日新聞昭和元年二月二十九日朝刊「学界余談）練達といふ事」にも「この頃はゴルフが好きで盛んにやるが、年月の割に長足の進歩をしたのは、やはり身体で覚たる主義の賜である」とあるので、真実は、我妻の憶測通り、きっかけはやはりゴルフであつて、新ゴルフ場建設の際に分譲された南ヶ丘の別荘地を購入したものであろう。<sup>(3)</sup>

## （二）南原「友だちの村」

軽井沢ゴルフ倶楽部の「財団法人南ヶ丘会」が取得した土地は、雨宮敬次郎<sup>(4)</sup>が開墾事業を行った「雨宮新田」の一部であつた。<sup>(5)</sup>甲州財閥の巨頭「天下の雨敬」に関しては、稀代の相場師あるいは鉄道王としての印象が強烈であるが、明治一二年東京で興した製粉工場で成功した資本で、明治一六年軽井沢の官有地五百町歩と民有地六百町歩を取得して開墾事業を手がけた大地主でもある。だが、翌明治一七年離山南麓の一万坪の土地に大邸宅（雨宮御殿）を新築した後、同年のうちに彼は活動拠点を再び東京に戻し、製粉事業を拡大して今日の日本製粉の礎を築く一方、明治二十一年甲武鉄道の買収を皮切りに川越鉄道・北海道炭礦鉄道と鉄道事業に進出する。製鉄業では明治二八年東京市への水道用鉄管納

入をめぐる疑獄事件でつまづくが、その後は東京市街鉄道・江ノ島電鉄のほか、水力発電・海運・石油・貿易と、ありとあらゆる方向に事業を展開した。

こうした事情から、軽井沢で始めた開拓事業については、妻・信子の末弟・市村藤吉に委ねられたが、結論的にいえば、ほとんどの事業は失敗に終わった。ただ、毎年三〇万本ずつ植えられ総数七〇〇万本にも及んだカラマツの植林は、結果的に現在の軽井沢の景観形成に貢献した。軽井沢のカラマツ林の大半は、明治期以降の人工林であり、北原白秋が「落葉松」を明星大正一〇年十一月号に発表した当時は、まだ樹の背も低く、梢の上には浅間山が見えていた。

明治四四年の雨宮敬次郎の死後、事業を受け継いだ婿養子・雨宮亘も大正七年に五〇歳で死去すると、次代当主・雨宮鉄郎が未成年であったため、財産の切り売りが生じたらしい。なお、堤康次郎が千ヶ滝の土地買収に乗り出すのは、二代目・雨宮亘の死の前後である。<sup>(78)</sup>

一方、義兄・雨宮敬次郎より軽井沢の土地の管理を委託され、自身も大地主となった市村藤吉と妻・やその間には、三男二女が生まれたが、長女・長男は夭折、明治三十一年に二男が誕生した際、伯父・敬次郎は、自身の幼名を贈った。後に我妻栄と親交を結ぶ市村今朝蔵である（なお、その下には三男・寅之輔と二女・克子が生まれた）。

旧制上田中学から、早稲田大学政治経済学部に進んだ今朝蔵は、大山郁夫の下で政治学を学び、大正一二年大学を卒業した四月に佐久の製糸会社の娘・山岡きよじと結婚、五月には妻を伴いアメリカに留学、留学当初の語学研修先であるウイスコンシン大学（ウイスコンシン州・マディソン）において、文学部教授ケルシー（日本びいきの女性教授）の紹介で引き合わされたのが、同年六月文部省派遣留学生として市村より半月遅れでウイスコンシン大学の語学研修に入った我妻栄であった。我妻は留学前、末弘巖太郎から、現地では日本人と付き合わないよう言われていたのであるが（現在でも留学経験のある先輩からそのようなアドヴァイスを受けることがある）、「お腹をこわして心細くなったので、ついでケルシー先生に話したら」「日本から着いたばかりの、新婚の夫婦がいるから」と紹介してもらった、という経緯

であり、<sup>(81)</sup>このときの我妻の気持ちは分からないでもない。

その後、市村夫妻と我妻は、同年九月一日に母国で起きた関東大震災を心配しつつ、シカゴ大学へと移る。シカゴ行きの汽車も三人一緒であり、シカゴでの生活に関しても、新婚の市村夫婦宅で週に三度（一）も夕食を共にした我妻に、今朝蔵は食後の議論を大いに楽しんだ一方、きよじも「我妻さんは、私たちが結婚して最初にできた友人でした」といい「兄に対するような感情を榮に抱いた」と述懐する。<sup>(82)</sup>なお、市村は「シカゴ大学では社会学のスモール先生について勉強した」が、<sup>(83)</sup>我妻もまた「シカゴ大学で主に社会学を受講する。スモールの『財産社会学』の講義に影響を受ける」と履歴譜にある。<sup>(84)</sup>

翌大正一三年、我妻は、「アメリカ滞在が八ヶ月に及び、鳩山（秀夫）先生から『そろそろヨーロッパに移れ』との信書を受ける」に及んで、同年三月イギリスに渡り、以後半年間ロンドンに滞在する。<sup>(85)</sup>一方、我妻がシカゴを離れる大正一三年三月、市村夫妻には長女・米子が誕生、その後、同年六月下旬に二人はニューヨーク・コロンビア大学に移った後、九月下旬にドイツに渡る。以下、市村きよじの回想を転記すれば、<sup>(86)</sup>

ハンブルクに上陸し、次は汽車でベルリンへ向つたのですが、ベルリン駅の改札口に我妻さんが立っておられたのには目をぱち／＼させる程びっくりしました。「どうしてこの汽車に乗ってくるのがわかったの」と尋ねましたら、「市村君からの便りに九月下旬の船に乗る予定とあつたので、この船か、その次か、もう一つの次迄をマークして、この船となればこの汽車、次ではこの汽車と、どれにも迎えに出る予定でいたら、君達は一番先の船に乗っていてくれた」と喜ばれましたが、子供づれの私達は助かつたとほっとした思いでした。

コロンビア大学の先生から頂いて来た紹介状を我妻さんにお見せしたら、「君、この先生はたいへんな大先生なんだ、僕も一緒に行つていいかなあ」ということで二人揃つてその先生にお目にかかりに行きましたが、このこと等から考えても主人のアメリカでの大学生活は、何もかも充実した幸せなものであつたように思われます。



我妻がロンドンからベルリンに移ったのも同年九月のことで、「関東大震災で大損害を受けた東京帝国大学図書館再建のため、高柳賢三教授の指導の下に中川善之助氏と図書購入に尽力する」。また、自身の研究に関しては「ベルリンでは余り大学で受講せず、むしろアメリカ当時の勉強を継続したいと考え、イデオロギーの変遷と制度の変遷との関係を中心において参考書を集めた。カント、ヘーゲルから新カント派、新ヘーゲル派の著書、マルクス、エンゲルスなど社会主義理論、修正社会主義派、ウィーン学派などに関するものを購入、マックス・アドラーの著書及びマックス・ウェーバーの『社会と経済』などを熟読した」という<sup>(87)</sup>。

翌大正一四年四月下旬、市村夫妻はベルリンを発って、パリ、ロンドンに滞在後、五月下旬、ロンドンからスエズ運河経由で帰国する。我妻も、スイス、フランスに在留後、同年一二月に帰国の途に就くが、その船上で知り合った鈴木緑（東洋音楽学校（現・東京音楽大学）創設者・鈴木米次郎の三女。白百合女学校卒業後、パリの日本人外交官一家の許でフランス語の勉強をしていた）と知り合い、翌大正一五年三月七日に結婚する。なお、後の新聞記事には「我妻はインド洋でコイを釣った」と故鳩山秀夫教授に冷やかされた逸話だけが有名だ」とあるが、妻・緑の側では「（船上では）あまり話もしませんでしたね。話を面白くするために、そういうことになっているのではないかしら」と、つれない返答である<sup>(89)</sup>。翌昭和二年六月一七日長男・洋誕生（栄・緑夫婦が知り合った船旅のインド洋に由来するとの説もある）、昭和四年一月九日には二男・堯誕生<sup>(91)</sup>、練馬区石神井町に新居を建築するのも同年である。

その四年後の昭和八年、我妻栄は「市村今朝蔵氏に誘われ、蠟山政道氏と長野県軽井沢南原に別荘を建てる」<sup>(92)</sup>。南原は、前記軽井沢ゴルフ倶楽部の新ゴルフ場分譲地・南ヶ丘の西隣に位置する「市村今朝蔵・きよじ夫妻に属する約十萬坪の山林で……僅かな蕎麦の畑を除けば、丈高い雑草と灌木の荒れ地であった」<sup>(93)</sup>。

きよじによれば、「昭和七年春のある日、食堂のテーブルに大きな紙を広げていた主人が、『おい友達の小村を造ろうよ』と突然言い出しました」「僕はねー、五十になったら東京の仕事を全部切り上げて軽井沢へ帰るつもりなんだ。そ

の時自分一人だけではつまらないが、友達の村が出来ていけばみんながやって来る。山の中で思う存分語り合えるなんて素晴らしいことだよ」という次第で、図上での村作り計画が始まったのでした。<sup>(91)</sup>

もつとも、「我妻栄はその計画をすでに大正十三年頃（「つまりアメリカ・ドイツ留学生活時代」に今朝蔵から打ち明けられている。それから後の栄の心の中には、自分の別荘を建てるべき土地としての「村」が去来したのではないだろうか。今朝蔵の計画がまだ軌道に乗らない昭和三年という時点で、病後の洋〔当時一歳〕のために避暑地を選ぶ時には、軽井沢に家を借り、妻の縁も含めて、もう一度かつての二家族の交流を取り戻そうとしているのである。<sup>(95)</sup>

市村今朝蔵が「友だちの村」の計画を持ちかけたメンパーは、我妻栄のほか、蠟山政道<sup>(96)</sup>と松本重治<sup>(97)</sup>。我妻と蠟山・松本は一高・東大の同窓・同僚の旧知の間柄である。一方、市村と二人が知り合った時期は不明であるが、市村は、昭和五年三月に蠟山・松本らが立ち上げた東京政治経済研究所に、同年七月に引き入れられているから、<sup>(98)</sup>信頼関係はそれ以前に形成されている。しかし、昭和七年のうちに松本重治は上海に赴任してしまいうため、「昭和八年の開村初年度は、分譲地のほぼ中央に私達〔市村夫婦〕の家〔移築した旧近衛邸〕、道を隔てて子供クラブ、前方の中央道のまがり角に一寸大きな大工小屋を建て、そのさきの道を左にまがって右に蠟山さん、その後方少し離れて我妻さん、そして左側前方に貸別荘一棟〔松本重治海外赴任による応急措置〕という構成で始まったのでした。<sup>(99)</sup>

市村夫妻の「移築した旧近衛邸」とは、前記大正一五年に近衛文麿が購入した旧別荘で、現在は離山下の「雨宮御殿」跡地に再移築されて市村記念館となっており、二階展示室には、開村当時の住民の別荘の位置関係図も展示されている。一方、「子供クラブ」とは、「雨宮御殿」にあった朝香宮の子弟の「お勉強部屋」だった建物を移築したもので、<sup>(100)</sup>当初は村民のクラブハウスとして使用する目的であったが、「共同の先生をお願いして、子供たちと一緒に勉強させよう」と計画がまとまった。「父親たちは、後にはそれぞれの分野で頭角をあらわす人たちではあったが、当時はまだ若く、子供たちも小さかった。父親たちが書齋にこもっている間に子供たちが家にいて騒ぐのでは困る」からである。<sup>(101)</sup>

お、「我妻夫妻は、運動場から離れた、できるだけ淋しいジャングルのような場所に茶色の木造の別荘を建てた。窓枠は白く縁取り、ガレージもそなえていた。始終机に向うのだし、賑やかだと気が散るからという理由だった」<sup>(10)</sup>

そして開村の翌昭和九年、「友だちの村」は目覚ましい発展を遂げる。市村きよじの回想によれば、<sup>(11)</sup>

松本重治さんから前田多門さん（後の文部大臣、当時朝日新聞論説委員）へ、前田夫人が川村伴三さん（ブラジルで農園経営）、野村胡堂さん（本名長一、音楽評論家、時代小説家、別名あらえびす）、松田智雄さん（東大教授、後にケルンの日本文化会館館長）へ、また蠟山政道さんは弟の小山長四郎さん（群馬県松井田の醸造会社を経営）、我妻さんが東大の同級生の成富信夫さん（弁護士）、斉藤直一さん（裁判官で後に最高裁判事）、吾妻光俊さん（一橋大学教授、憲法学者〔実際は民法・労働法学者である〕）等々へとお仲間を広げて下さったこと、黒川武雄さん（虎屋店主、後に参議院議員、厚生大臣）が参加されたことで中野金次郎さん（国際通運社長）、出光佐三さん（出光商会社主、貴族院議員）へと村の話はどんどん広がっていったのでした。

一方、日本女子大関係の方々にも村の住民となってももらいました。前年夏の終り頃、かつてシカゴでお世話になった大橋広子先生を日本女子大三泉寮にお訪ねした際、ちよつと村造り計画をおしゃべりしたのが、女子大の先生方のお耳に入り、次々と参加の申し込みになりました。後に日本女子大の学長となられる井上秀先生、茅野蕭々・雅子先生、菅支那子先生などで、これがまた、その後の長い日本女子大とご縁の始まりになるうなどとは思いつきませんでした。

これが縁で市村今朝蔵は昭和九年より日本女子大に奉職することとなるが、その後、日本は泥沼の戦争へと突入し、やがて昭和二〇年八月一五日の敗戦を迎える。だが、この時代になっても、我妻栄と市村今朝蔵の友情は、二〇年以上前の留学時代と一向に変わっていない。市村きよじの回想によれば、<sup>(12)</sup>

その翌日〔終戦から四日目〕、我妻栄さんが来宅されて、「何も手につかないんだ」とがつくりされたまま、まる

で告白でもするみたいに話し始めました。先生はお茶が好きだから、おいしいお茶でもいれてさし上げようと茶釜の前に座って頃合いを見計らっておりますと、主人は「僕はもう計画立てましたよ、僕の計画はねー、ねー、ねー」と先生の顔を見つめながら自分のことだけを話し始めたのでした。暫くの間をおいてから、そろそろお茶を差し上げる頃合かなと感じましたので、急いでお茶をいれ、お盆を持って立ち上がりましたところ、「奥さん、悪いけれどお茶はまた頂きに来ます。仕事がしたくなかったです」とあわただしく帰って行かれたのです。主人にはこの辺の呼吸に特に才能があったような気がしますが、ふとその時、ベルリンではこちらが特別の心遣いを受けたことを思い出し、男の友情って味のあるいいものだなあと感じ入ったのでした。

ドイツでの冬の初め、主人は毎日頭が痛くて痛くて大変困ったことがありました。水枕を試みたり、いろいろと工夫をこらしてみましたが、よくなることなく大変心配したことがあったのです。その時に我妻さんが来られて、「奥さん、市村君を一晚僕に貸して下さい。夕食を済ませてから送って来ますから」と言い残して二人で出かけて行きました。夜になってからかなり酔っている様子で帰って来ました。そしてその翌朝です。「おい、おかしいぞ、頭の痛いのがすっかり直っているよ」というのです。嬉しいやら有り難いやらのことでしたが、こんなことであるものかとびっくりしたことがあったのです。我妻さんが帰られた後、ふとこの思い出がよみがえり、今日はよい恩返しになったと独り合点しながら、少しさめたお茶を二人で飲んだ思い出は今もあざやかであり、なつかしい限りです。

その五年後の昭和二五年四月、市村今朝蔵は早稲田大学教授に就任するが、しかし、そのわずか二か月後の六月九日、講義終了後の廊下で倒れ、大学の医務室で死去した。死因は脳出血、母校・早稲田を心より愛しながらも、五〇歳になつたら郷里・軽井沢に帰りたいたと語っていた、五一歳の生涯だった。

翌昭和二六年、ともに大学生だった我妻家の長男・洋と市村家の三女・令子は、二人で南原の「子供クラブ」を運営

し、それがきっかけで、その後次第に親密な関係になってゆく。だが、洋はすでに他の女性と学生結婚していた。「離婚したいと言いだした洋に、栄は激怒した。言葉では充分に表現できないと思ったのか、『親の顔に泥を塗るような息子は、子とも思わぬ、親とも思わぬ』という手紙を渡し、親子の縁を切ったのだ。縁は、家庭裁判所の調停〔委〕員を辞職するという形で責任を取った。夫婦は、洋を出す代りに日子〔洋の学生結婚の相手〕を家にとどめ、大学へ通わせることに決めた<sup>(66)</sup>。そして、昭和二九年に留学した令子（令子と洋の交際で心を痛めていたきよじは、逃してやるつもりで令子の船出を見送った」という）に続いて洋もアメリカに渡り、八月一八日パークレーの長老派教会で二人は結婚式を挙げる……。

……話を軽井沢に戻そう。軽井沢町立離山図書館は、故市村今朝蔵の妻・きよじと子供たちの寄付をもとに、旧「雨宮御殿」裏山に建設されたものである（昭和五一年三月開館。なお、きよじはその後平成六年一月二八日九三歳で死去した）。同図書館は、前掲【図表4】をはじめとする軽井沢地図等を所蔵するほか、「友だちの村」の住人の旧蔵書も寄贈されており（二階電動書架に配架されている）、その中には、「市村今朝蔵文庫」「蠟山政道文庫」「三輪寿壮文庫」などと並んで、「我妻栄文庫」も存在している。蔵書目録は「市村文庫」以外作成されていないため、収蔵書に関して現場で確認するほかはないが、「我妻文庫」に関していえば、法律専門書は見当たらないようである<sup>(66)</sup>。

#### 四 星野温泉と田中誠二

##### (一) 千ヶ滝と横田喜三郎

『軽井沢町誌』『年表』の昭和二年の項には「千ヶ滝に、横田喜三郎・中村孝也・長谷川如是閑・浅原六郎・沖野岩三

説 論 郎・吉岡弥生・中村吉蔵・帆足理一郎・安部磯雄・阿部知二・小津安二郎らの山荘が「でき文化村を形成する」とある。<sup>(註)</sup>

しかしながら、このうち横田喜三郎<sup>(註)</sup>が別荘を建てたのは、昭和九年のことで、そして、そのきっかけは、我妻栄（横田より一歳年下）の勧誘であった。以下、横田の自伝をそのまま引用しよう。<sup>(註)</sup>

## 二 軽井沢の別荘

一九三四（昭和九）年に、軽井沢の千ガ滝に別荘を建てた。その前年の夏に、はじめて軽井沢へ避暑に行った。東京大学法学部の長老教授のうち、立作太郎、小野塚喜平次、杉山直治郎の諸先生が軽井沢に別荘をもっておられた。大学教授には、夏に長い休暇がある。それを涼しい軽井沢ですごすことは、健康のためにも、研究のためにも、理想的である。わたくしより二年前に卒業した我妻栄君と蠟山政道君も、一九三二（昭和七）年に、別荘を建てた（……完成は上記のように昭和八年である）。そのころに、軽井沢の出身で、早稲田大学教授に市村今朝蔵という人がいた。軽井沢に広大な山林を所有し、その一部を文化人の別荘を建てるために安く分譲した。我妻、蠟山君は市村君の友人であったから、その分譲地に別荘を建てた。

我妻君は、わたくしにも、そこに別荘を建てるように勧めた。別荘を建てる前に、ひと夏を軽井沢ですごしてみようとおもって、一九三三（昭和八）年に別荘を借りた。千ガ滝の山の中の別荘であった。非常に涼しく、勉強もはかどった。家族の健康のためにも、とくに生まれて一年の浩（横田喜三郎の二男）のためにも、非常によかった。芦屋に住んでいた父母もやって来て、一週間ばかり滞在し、気に入った。別荘を建てる場所は、千ガ滝を選んだ。我妻君は、自分の別荘のあるところにと勧めたが、そこは平地で、東京の郊外と変わらないような感じであった。千ガ滝は、浅間山のゆるい山すそにある。谷があり、山があり、樹木がうっそうと繁っている。うぐいすが鳴き、リスが走る。すっかり都会を離れた感じで、気分が一新する。我妻君の勧めがあつたけれども、千ヶ滝を選ぶことにした。

東京に帰る前に、土地を買う契約をした。箱根土地株式会社（後の国土計画株式会社）が千ガ滝地区の土地を分譲していて、それを買った。あくる年に、家を建てた。

別荘ができてからは、七月の中ごろから、九月のはじめまで、ほとんど二カ月、ずっと軽井沢ですごした。午前中は勉強し、夜もいくらか勉強した。涼しいから、能率があがる。午後はテニスをした。ときどき、家族とピクニックに行った。行き先は、鬼押出し、浅間牧場、碓氷峠などであった。友人や親類の人が来ると、これらのところへ見物に案内した。小諸の懐古園へもよく行った。

ほとんどまい日、テニスをした、千ガ滝の中央に、コートが二面あった。箱根土地会社が設けたもので、千ガ滝に別荘をもっている人の子弟がテニスをした。三〇人くらいで、ほとんど学生であった。そのほかに、私と同じくらいの年の橋本さんという人がいた。テニスの仲間は、千ガ滝の人ばかりであったから、非常に親しくなり、ほとんど家族的といってよかった。いっしょに、ピクニックに行くこともあった。

大正七年「千ヶ滝遊園地株式会社」を設立して千ヶ滝地区の別荘開発に乗り出した堤康次郎は、大正九年「箱根土地株式会社」を設立して、千ヶ滝のほか箱根の別荘開発にも着手し、その後も南軽井沢（大正一三年）、さらには東京でも目白文化村（大正一一年）・大泉学園都市（大正一三年）・小平学園（大正一三年）・国立大学町（大正一四年）といった大規模宅地開発を手がけるようになるが、同社は、戦時中の昭和一九年、国策によつて社名を「国土計画興業株式会社」に改める。それが横田記載の「国土計画株式会社」に変わるのには、昭和四〇年のことである。さらに、平成四年に社名を「コクド」に変更した後、西武グループの再編により平成一八年に解散。したがって、上記横田の記載は、現在では「西武プロパティーズ」と読み替えるべきことになる。

## (二) 田中誠二「星野山荘」

我妻栄や横田喜三郎の軽井沢行きが、大学教授になって以降であるのに対して、田中誠二は、大正七年、旧制第一高等学校三年の夏休みの三週間を、同級の呉茂一と、旧軽井沢・つるや旅館に逗留している。

翌大正八年、東京帝国大学法学部一年生となった夏も、田中は呉らと同地で過ごしているが、滞在先は、三年前（大正五年）に末川博が高等文官試験の勉強で籠もったのと同じ、旧碓氷峠の熊野神社（【図表1】②）の神主の家の一室であり、このときには「有島武郎氏を三笠ホテル近くの別荘（【図表1】⑭浄月庵）に訪ね、社会思想と文学との関係につき意見を聞いたりした」。

その四年後、大学院の特選給費生時代の大正一二年の逗留先は、追分の油屋旅館であった。

当時の油屋は、高等試験準備の大学生の滞在が多く、勉強には好都合であった。そして近くの追分の元本陣には、当時法学部助手で英米法専攻の末延三次君（東大名誉教授・立教大学教授）が、同郷の友人の電気工学専攻の古賀逸策君（東大名誉教授）と同行して来ておられ、時々会っては、いろいろの話をした。この時も、勉強のために滞在していたのであるから、ほとんど、どこにも遠出をすることはなかったが、右の末延君と共に、当時万平ホテルに滞在中の高柳賢三先生（東大名誉教授）を訪ねて、同ホテルでご馳走になり、後三笠ホテルの方まで、先生に随行して散歩し前年心中した前記有島武郎氏の別荘跡を訪ねたことがあった。

右の記述中、有島武郎<sup>⑮</sup>の心中は、実際には、田中が軽井沢を訪れる当年（大正一二年）六月九日（発見は七月七日）のことである。一方、田中が追分に滞在中の九月一日には関東大震災が起こる。油屋旅館の揺れも大きかったようで、滞在客一同は皆走って庭や戸外に逃れ、翌九月二日、田中は急ぎ東京に戻る。

田中が「大正十二年のつぎに軽井沢で一夏をすごしたのは、留学から帰朝し、二年半ぐらいたって、一橋大学教授に



なつた年の昭和八年のことであつた<sup>(11)</sup>。田中より一歳年上の我妻栄が南原「友だちの村」に別荘を構えた年であるが、しかし、田中にあつては、「この頃は、毎月の収入は、支出にやっと足りるかまたは足りないという時代であるから、軽井沢に別荘を購入することなどは、まず考えられないので、貸別荘のうちの手頃のものを探して、五月頃借入の契約をすまして、七月十日頃の夏休み入り後なるべく早く軽井沢に出かけるという次第である」<sup>(12)</sup>。

翌々年の昭和一〇年も、田中は軽井沢で夏を過ごしている。「このときは、昭和八年の貸別荘を借りないで、鉄道線路の南側にあつて、現在の晴山ホテルの前身である根津嘉一郎氏の別荘の近傍に数個あつた貸別荘の一つを借りた」<sup>(13)</sup>。「晴山ホテル」（昭和二五年三月開業）とは、現在の軽井沢プリンスホテルのことである（昭和四八年四月改称）。

その後の戦時体制の下で足が遠のいた田中誠二が、再び軽井沢で夏を過ごすようになるのは、戦後、昭和二六年のことであるが、滞在地として最終的に彼が選んだのは、星野温泉であつた<sup>(14)</sup>。

その〔避暑地の〕決定に当り夏休みを健康回復と読書執筆とですすむのには、軽井沢が最適であることは、戦前夏休みを何度か軽井沢ですごしたことのある私には、直ちに明白であつて、迷うことはなかつたが、軽井沢のどこにするかについては、若干迷うところがあつた。その際に、私は、何より仕事本位に考え、思索や執筆の上で最も好都合の場所を自分の経済の許す範囲で選択することとし、それには広い軽井沢高原の中で、温泉といえる程度の湯が出て、入浴の設備も一応整っている星野温泉を利用できる別荘を購入するのが適当であると思つた。しかし、最初の年は、他人所有の別荘を借りて一夏をすごし、星野山荘の生活が自分に適当しているか否かを確かめた上、次の夏までの間に、できるだけ星野旅館に近く、しかも騒音のため、仕事の邪魔にならない範囲にあつて、古いが、しかし構造堅固の小別荘を買い求めた。そして翌年の夏から現在まで、十五年にわたつて、毎夏二カ月にわたり、これを利用して、一応快適であつて、始めの期待に反するようなことは生じていない。

旧軽井沢の外国人避暑客は、（ベルツと違って）日本の温泉文化とは無縁であり、旧軽井沢の日本旅館にも温泉はな

い。一方、軽井沢には、現在、全部で六つの温泉——①塩壺温泉・②小瀬温泉・③星野温泉・④千ヶ滝温泉・⑤塩沢温泉・⑥ゆうすげ温泉——があるが、このうち戦前から存在するのは①・②・③の三つである（④・⑤は比較的最近になって別荘客用に作られた入浴施設、古宿にある⑥はテニス合宿向けのコンセプトである）。その中であつて、③星野温泉は、大正一〇年多数の文化人を講師に招いて開催されたサマーセミナー（芸術自由教育講習会）を機に、芸術・文化重視の方針で事業展開を行った点が特徴的であり、あの頑迷な内村鑑三（註）のお気に入りであつたほか、「野鳥の森」に隣接して開発された別荘地についても、田中誠二は「星野旅館や別荘の諸般の修理や世話を取り扱っている事務所の役員や従業員が、学者、小説家、画家等の文化人の仕事や生活に理解を有し、敬愛の念をもつてくれるので、事務所や旅館に諸種の用事を依頼するのに、遠慮がなく、充分なかつ迅速なサービスを期待できることである」と、手放しの褒めようである。（註） ちなみに、田中が別荘を購入した昭和二六年、星野温泉は法人化し（株式会社星野温泉）、上記大正一〇年の文化人によるサマーセミナーの際に建築された「星野遊学堂」（内村鑑三命名。昭和一六年「軽井沢高原教会」に改称）を用いて昭和四〇年以降ブライダル事業に進出、平成七年には社名を星野リゾートに変更して、全国の経営不振に陥つた旅館・リゾート施設の再生事業を展開している。（註）

## 五 結びに代えて

以上に述べたほかにも、軽井沢に別荘を所有する法学者は多数存在している。さしあたって以下では、田中誠二の記述をそのまま引用しておく。（註）

私の山荘のある星野温泉別荘地内に別荘を有している法学者としては、東大教授有泉亨君があり、同君が星野の最北端の空地に別荘を新築されたのは、三、四年前のことである。最も新しい方である。他に星野別荘地内に別荘を有

している法学者としては、蕨尾の山の上の森の中の家のある一又正雄君（前早大教授）がいる。また社会学者として星野別荘地内に別荘を所有しているのは……〔略〕……。

星野別荘地内に別荘を有していられる社会学者としては、以上の人々があるが、それ以外の場所に別荘を有している人々については法学者だけについて述べ、それ以外の社会学者については省略する。星野別荘地に近い千ヶ滝中区に別荘を有し、毎年来ている法学者としては、宮沢俊義（東大名誉教授、立教大学教授）、菊井維大（宮沢氏と同様）、横田喜三郎（東大名誉教授、最高裁長官）、小池隆一（慶大教授）、高鳥正夫（慶大教授）、片山金章（中大教授）、吉永栄助（一橋大教授）等の諸氏がある。その大部分は、それぞれの専門とそれぞれの大学における長老格の法学者である。前には千ヶ滝中区に別荘を有していたが、三年前に千ヶ滝西区（西千ヶ滝）の第二分譲地の閑静なところに、新しく地所を買い別荘を新築し、現在はここで毎夏休みを送っているのは、一橋大学教授で英米法専攻の田中和夫君である。

星野別荘地から大分離れた場所に別荘を有している法学者としては、南原における我妻栄（東大名誉教授）、斎藤直一（東洋大教授）、吾妻光俊（一橋大教授）の三君、旧軽井沢における長谷川元吉氏（青山学院大教授）、中川善之助君（東北大学名誉教授、学習院大学教授）とがあり、旧軽井沢でも離山麓に近いところに別荘を有しているのは、勝本正晃氏（東北大学名誉教授、専修大学教授）とその女婿の団藤重光君（東大教授）である。また追分（西軽井沢）に別荘を有している法学者としては、豊崎光衛（学習院大学教授。一九八〇〔昭和五五〕年七月二九日急性心不全のためこの別荘で死去）および高窪利一（中央大学）の両君がある。その他にも相当あると思われるが、明確でないから、省略する。

現在の状況は、右のとおりであるが、今から四〇年ないし三〇年前の状況はどうかというと、軽井沢に別荘を有している法学者としては、鳩山秀夫、末弘厳太郎、杉山直治郎および立作太郎の諸先生であり、別に政治学者とし

て小野塚喜平次先生があつた。これらの諸学者は、いずれも東大法学部教授に限られており、かつ、その別荘の所在地は、旧軽井沢の中の最上等の別荘地ともいふべき鹿島の森を中心としてその周辺に限られていた。またこの別荘は、いずれも地所は広く、五〇〇坪以上のところが多く、家屋も相当宏壮なものが多かつたように思う。これに反して現在の軽井沢に別荘を有している法学者は、東大法学部教授以外に他大学の教授が多く、その場所も、旧軽井沢の鹿島の森以外のところが多く、又一部の人を除いては、地所家屋共に、質素のものが多くいようである。四〇年前ないし三〇年前のそれに比し、相当劣り、これに反し所得税や特別区民税の負担が著しく増加していることを示すのではないかと思うので、若干の感慨なきを得ない。

平成の現在、軽井沢に別荘を構える法学者に関しては、個人情報に属するため、名前を挙げるのは控えておく。代わりに、九州大学教授であつた舟橋諄<sup>(註)</sup>の別荘をめぐるエピソードを紹介しておこう。内山尚三<sup>(註)</sup>は、舟橋が昭和三九年三月九州大学を定年退官し、四月より法政大学に移つた後の、あるパーティーにおける、舟橋と有斐閣四代目社長・江草忠充との間の、次のようなやり取りを明かしている。<sup>(註)</sup>

〔舟橋〕先生は退官して弁護士という実務の仕事に専念したいという気持をもつておられたようですが、法政大学で講義をすることを余儀なくされたこともあつたのでしようか、研究に重点を移されたように見られ、有斐閣の法律学全集の改訂版の完成に力を注いでおられました。江草忠充社長と一高時代にご一緒だったらしく大変親しい間柄のようでした。どこかのパーティーで、先生が、軽井沢に土地を持っているので、別荘を建てようと思つているが、金を貸してくれないかと言われたら、江草社長が、物権法の改訂版が完成したらいくらでも貸すよといふあつていたことを側で聞いたことがあります。

法政大学といへば、大正期末、時の学長・松室致<sup>(註)</sup>が、草津軽便鉄道（大正四年営業開始、大正一三年草津電気鉄道に社名変更、大正一五年新軽井沢・草津間全線開通）より買い受けた群馬県吾妻郡長野原町（国道一四六号を浅間山・峰

の茶屋を越えた向こうの北麓（一帯）の土地を、法政大学教授・野上豊一郎（野上弥生子の夫）らに分譲して昭和三年にできた「法政大学村」が有名であり、開村に合わせて当地の「地藏川」駅は「北軽井沢」駅に改称された（昭和二年）。軽井沢の住人は「あそこは群馬県（上州）であつて軽井沢（信州）ではない」というが、野上夫妻の別荘を訪れ同地に魅せられた岩波茂雄（岩波書店創業者。野上豊一郎・安倍能成と一高の同級生）が強力な勧誘を行い、安倍能成、津田左右吉、小泉信三、岸田国士ら錚々たる文化人が村民に加わつた結果、北軽井沢は、旧軽井沢・中軽井沢・追分とならぶ一大文化村を形成するに至つた。<sup>(30)</sup>

なお、草軽電気鉄道（草津電気鉄道から昭和一四年に社名変更）は昭和三七年に全線廃止となる。その二年後の昭和三九年に福岡から東京に居を移した舟橋諄一（横田喜三郎より四歳年下・我妻栄より三歳年下・田中誠一より二歳年下）が、いつ別荘地を購入したのか、それが北軽井沢の法政大学村であつたのかについては、まったく調べていない。また、有斐閣「法律学全集」の舟橋諄一『物権法』（昭和三五年）は改訂されることなく終わつたが、舟橋が結局別荘を建築したのかどうかについても未調査である。

- (1) たとえば毎日新聞に連載された御厨貴「権力の館を歩く」シリーズの「軽井沢・宮沢氏の別荘」平成一九年七月一九日朝刊、「長野・軽井沢別荘地（戦中編）」平成二二年八月一九日朝刊、「長野・軽井沢別荘地（戦後編）」平成二二年九月一六日朝刊……〔文庫化〕御厨貴「権力の館を歩く——建築空間の政治学」（ちくま文庫、平成二五年）一六九頁、一七八頁、一八七頁など。
- (2) このほか、①・②よりさらに一〇年ほど古いが、③軽井沢高原文庫『軽井沢と文学——軽井沢文学ガイド』（軽井沢高原文庫、平成四年）の記述も重宝する。
- (3) 本陣旅館の廃業時期については未調査であるが、加賀乙彦（かが・おとひこ（1929-））。作家、軽井沢高原文庫館長。昭和四二年「フランドルの冬」でデビュー。昭和四九年追分に別荘を建築。なお、彼——本名・小木貞孝（こぎ・さだたか）——は、「日本に於ける死刑ならびに無期刑受刑者の犯罪学的・精神病理学的研究」で医学博士号を取得した犯罪学会・国際犯罪学会所属の精神科医でもある）によれば、「原卓也さんや僕が発起人になつて、追分の『本陣』という旅館にみんなが集まつて酒を飲む『追分の会』

を作ったんです。小島信夫さん、中村真一郎さん、辻邦生さん、遠藤周作さん、矢代静一さんが出席して。会は中村さんが亡くなる十数年前まで続いていた」という。セオリー二〇一〇（平成二二）年四月号八頁、なお、加賀乙彦「文士と軽井沢の宿」高原文庫二五号（平成二二年）九頁以下も参照。一方、油屋旅館は、平成二〇年に経営者が亡くなり廃業したが、平成二三年ギャラリーとして再生、翌平成二四年には旅館営業（ただし素泊まり限定）も再開した。

(4) Alexander Croft SHAW (1846-1902). 一八四六年二月五日カナダ・トロント生まれのイギリス人。同地のトリニティ・カレッジを卒業後、一八七〇年に長老職任命の按手礼を受け、一八七三（明治六）年福音伝播会伝道局より宣教師として日本派遣を命じられて来日。福沢諭吉の知己を得て福沢家子女の家庭教師となり、福沢邸の隣の洋館に居住して、慶応義塾の倫理学教授として尾崎行雄らを教える一方、明治九年には最初の宣教拠点として三田に聖保羅（パウロ）会堂を開設した。現在の芝公園・聖アンデレ教会の前身である。明治三五年三月一三日芝の自宅で死去。享年五六歳。墓所は青山外国人墓地にある。

(5) James Main DIXON (1856-1933). 一八五六年四月二〇日スコットランド・ペイズリー生まれ。父は長老派教会の牧師。一八七九（明治一二年）年母校セント・アンドリュース大学（スコットランド）の哲学・英文学のチューターとなるが、同年工部大学校の招聘を受けて来日、その後、明治一九年設立の（東京）帝国大学文科大学の英文学・史学の講師となる。一八九二（明治二五）年アメリカに渡り、ワシントン大学に赴任。一九〇一（明治三四）年アメリカに帰化、一九三三（昭和八）年九月二七日ロサンゼルスで死去。享年七九歳。

(6) 『軽井沢町誌・歴史編（近・現代編）』（軽井沢町誌刊行委員会、昭和六三年）一一〇頁、「年表」六二二頁。

(7) 高原文庫二五号「開館二五周年記念 文士と宿・軽井沢」（平成二二年）「資料編（万平ホテル）旅籠亀屋から万平ホテルへ」五八頁。

(8) Karl RATHOGEN (1855-1921). 一八五五年三月一日ドイツ・ワイマール生まれ。ゲッティンゲン大学政治学博士。一八八二（明治一五）年来日。当初三年の滞在予定が、明治一九年帝国大学設立後も法科大学で国法学・統計学・行政学の講師を務め、また、農商務省の嘱託として取引所関係法規の立案に参画した。一八九〇（明治二三）年の帰国後は、ベルリン大学講師から、マールブルク大学教授、ハイデルベルク大学教授等を歴任し、日本経済や財政に関する多くの著作を残した。

(9) 佐藤孝一編著『かるゐさわ』後掲注(40)四六頁、『軽井沢町誌・歴史編（近・現代編）』（前掲注(6)）一〇九頁、「年表」六一七頁。

(10) Erwin von BAEI.Z (1949-1913). 一八四九年一月一二日南ドイツ・シュヴァーベンの小さな田舎町ビーティヒハイムに生まれた。チュービンゲン大学からライプツィヒ大学を卒業後は、ライプツィヒ大学講師（内科）を務めていたが、一八七六（明治九年）年東京医学校（東京大学医学部の前身）講師として来日。明治三五年東京帝国大学退官後も宮内省御用掛を務め、明治三八年

- 日本人の妻・花と帰国。一九一三（大正二年）八月三二日ドイツ・シュツットガルトにて動脈瘤のため死去。享年六四歳。なお、夫人の花は、その後日本に帰国し、昭和一二年夫のかつての勤務先であった東京帝国大学附属病院で死去した。
- (11) トク・ベルツ編（菅沼竜太郎訳）『ベルツの日記（下）』（岩波文庫、昭和五四年）一七三頁以下。
- (12) 戦前の旧軽井沢三大ホテル（万平ホテル・軽井沢ホテル・三笠ホテル）のうち、山本直良の三笠ホテルの営業開始は明治三十九年五月二十九日である。一方、佐藤万平と佐藤熊六は親戚筋に当たるが、熊六の本陣（軽井沢ホテル）は、万平ホテルと旧街道を隔てたはず向かいに位置することから、競合を避けるため、万平ホテルは、明治三五年、現在の桜の沢に移転した。両者の位置関係については、後掲【図表4】に「軽井沢ホテル」「万平ホテル」の表示がある。なお、その後、昭和一三年に軽井沢ホテルは廃業、三笠ホテルも戦後の昭和四五年に廃業し、万平ホテルも平成一〇年に森トラストに買収された。
- (13) なお、当時の軽井沢ホテルの客室数は三〇室であるのに対して、万平ホテルは一階に四部屋、二階に九部屋の計一三室であり、別館（浅間館）が増築されるのは明治三八年である。佐藤芳寿「軽井沢ホテルを語る」高原文庫一五号（平成一二年）二三頁、万平ホテル史料編纂担当『万平ホテル——創生期の記憶』（万平ホテル、〔初版〕平成二二年……〔改編〕平成二五年）六頁。
- (14) 『ベルツの日記（下）』前掲注(11)「九月十九日（草津）」条一七七頁。
- (15) 『かるゐざわ』後掲注(40)五一頁……〔再録〕『軽井沢町誌・歴史編（近・現代編）』前掲注(6)「年表」第8表 外国人避暑客国籍別調査表」六三六頁。
- (16) はった・ゆうじろう（1899-1930）。嘉永二年一月一七日福井藩士の子として生まれる（生地は福井とする文献と江戸とする文献がある）。明治三年海軍兵学校に入り、翌四年海軍修業のためイギリス留学し、一〇年間の滞在の後、明治一四年に帰国するが、一七年には東伏見宮の英仏留学の輔導役として再び渡欧し、六年間の滞在の後、明治二三年帰国。のちに軍籍を退いて育英事業・船舶事業に従事し、また、明治四五年より衆議院議員を二期務めた（一、大正六年）。昭和五年一月二三日死去。
- (17) 『かるゐざわ』後掲注(40)四七頁、『軽井沢町誌・歴史編（近・現代編）』前掲注(6)一一二頁、「年表」六二四頁、軽井沢散歩の会編『軽井沢散歩24コース』（山川出版社、平成一四年）一四八頁、宮原安春『リゾート軽井沢の品格』（軽井沢新聞社、平成二一年）二六頁。
- (18) かつら・たろう（1848-1913）。弘化四年一月二八日長門国萩生まれ。十代で戊辰戦争に従軍して奥羽各地を転戦。明治三年普仏戦争視察の大山巖・品川弥二郎とともに欧州に渡り、三年間のベルリン滞在後、明治六年に帰国して陸軍に出仕。明治七年に駐在武官として再びドイツに渡り、明治一二年帰国。一九年陸軍次官、二三年陸軍中将となり、その後、明治三四年・明治四一年・大正元年の三度にわたって内閣を組織。大正二年一〇月一〇日脳血栓のため東京・芝三田の自宅で死去。享年六七歳。
- (19) すえまつ・のりずみ（けんちょう）（1855-1920）。安政二年八月二〇日豊前国（現・福岡県行橋市）生まれ。伊藤博文に見出さ

れ、明治一一年英国公使館付一等書記官見習として渡英、ケンブリッジ大学に学び、九年間の在英生活の後、明治一九年に帰朝。明治二二年伊藤博文二女・生子と結婚、明治二五年から二九年まで法制局長官を務め、明治三一年第三次伊藤内閣では逓信大臣、三三年第四次伊藤内閣では内務大臣。しかし、その後の伊藤の政界への影響力低下と死去の後は権勢を失い、大正八年には泉源亭を売却。翌大正九年一〇月六日死去。六六歳。七戸克彦「現行民法典を創った人びと(4) 主査委員①末松謙澄・伊東巳代治」法学セミナー六五六号(平成二二年) 八七頁参照。

(20) 『かるゐざわ』後掲注(40)八四頁、宮原・前掲注(17)三二頁。末松はその後も 付近一帯の土地を買い増して、別荘を建築している。旧街道北側・【図表4】北6番など(なお、【図表4】の「末松謙澄」の文字部分の書込み(丸囲い)は、原図に書き込まれていたものである)。一方、妻・生子が軽井沢の別荘で詠んだ歌集として、末松生子「軽井沢百首」(私家版、明治四二年)がある。(21) かじま・いわぞう(1841-1912)。天保五年一〇月四日江戸生まれ。父の創設した建築請負業・鹿島方を受け継ぎ、明治期以降は毛利家東京本邸など西洋館の建築業者として名を馳せ、明治一三年鹿島組(現・鹿島建設)を創設して、全国の鉄道建設を手がける。明治四五年二月二日死去。享年六九歳。

(22) なお、【図表4】で別荘番号の付番されている別荘は、翌明治三二年に日本人向けの貸別荘として建築したものである。地図には「西7番」が記載されていないが、貸別荘は計六戸建設された。

(23) みつい・さぶろうすけ(たかかげ)(1850-1912)。嘉永三年二月一八日京都に生まれる(高景が本名、三郎助は通称)。明治五年三井同族子弟五人とともに銀行業見学のためアメリカに渡り二年間滞在。帰国後は三井家の事業に従事し、明治二五年三井鉱山会社社長に就任、三井家の鉱山業部門の基礎を固める。明治四五年四月六日鎌倉で死去。享年六三歳。

(24) なお、三井三郎助は、日本で最初の女子高等教育機関である日本女子大学(明治三四年創立)の創立委員の一人であり、大学創設の激務で体調を崩した初代校長・成瀬仁蔵(なるせ・じんぞう。1858-1919)を別荘に招いた。このことが機縁となつて、明治三九年、三井別荘の広大な敷地の一角に建築されたのが、日本最初の夏期学校寮である日本女子大学「三泉寮」【図表4】北(656番)である。

(25) えぎ・まこと(1858-1925)。安政五年九月一九日岩国生まれ。明治一七年東京大学(旧制)法学部首席卒業後、司法省・内務省に奉職するが、明治二五年官を辞して弁護士に転ずる。明治二六年より法典調査会委員、明治三二年には法学博士を授与された。明治・大正期を代表する弁護士の一人である。大正一四年三月感冒から肺炎を併発し四月八日死去。享年六七歳。七戸克彦「現行民法典を創った人びと(15) 査定委員⑨江木衷」法学セミナー六六七号(平成二二年)五六頁参照。

(26) 『かるゐざわ』後掲注(40)九三頁。

(27) 江木衷『冷灰全集(第四卷)』(冷灰全集刊行会、昭和二年)「書翰集」九六〇―九六一頁。



- (28) 江木衷『冷灰全集（第四卷）』前掲注(27)「書翰集」九六五―九六六頁。
- (29) えぎ・かずゆき(1853-1932)。嘉永六年四月一四日岩国生まれ。開拓使仮学校、大学南校、工部大学校中退。明治七年文部省に出仕し文部官僚として頭角を現す。明治二五年内務省に転じ、明治一九年茨城県知事、明治三〇年栃木県知事、同年愛知県知事、明治三一年広島県知事、明治三六年熊本県知事。明治三七年より貴族院議員、大正一三年清浦奎吾内閣の文部大臣の後は、昭和七年の死去まで枢密顧問官。昭和四年一〇月頃より健康を害し、昭和七年八月二三日胆嚢炎が再発して死去。
- (30) 江木千之「冷灰全集の後に書す」『冷灰全集（第四卷）』前掲注(27)二―三頁。
- (31) 江木千之・前掲注(30)三頁。江木衷『山窓夜話』（有斐閣、明治四二年）……〔所収〕『冷灰全集（第四卷）』前掲注(27)二七―二七二頁以下などが、その代表例である（その「緒言」は次のように始まる。「今茲夏暑を避けて井陘山中の草庵に在り。雲は雲般に白く、山は山般に青し。……」）。
- (32) あおやま・たねみち(1859-1917)。安政六年五月一五日美濃苗木藩士の子として江戸に生まれる。明治一五年東京大学（旧制）医学部卒業、翌一六年ベルツの推薦でベルリン大学に留学、明治二〇年帰国後（東京）帝国大学医科大学教授に就任、明治三四年医科大学長、大正三年伝染病研究所所長。しかし、食道癌により大正六年九月医科大学長を辞任、重病の床で男爵を授けられ、同年一二月二四日死去。享年五九歳。
- (33) ささき・せいきち(1855-1939)。安政二年一二月一江戸本所生まれ。文久三年杏雲堂（病院）創立者で従兄弟の佐々木東洋の養子となる。明治一二年東京大学（旧制）医学部を卒業して、翌一三年ドイツに留学、明治一八年帰国後（東京）帝国大学医科大学教授となるが、明治二八年職を辞して養子先・杏雲堂病院の副院長となり、大正七年初代院長・佐々木東洋の死去後第二代院長に就任。昭和一四年七月一一日死去。享年八五歳。
- (34) 『かるゐざわ』後掲注(40)九五頁。
- (35) にとべ・いなぞう(1862-1933)。文久二年九月一日盛岡生まれ。明治一四年札幌農学校卒業（内村鑑三と同期の第二期生）、明治一七年より三年間のアメリカ留学から、二〇年ドイツに渡り、二四年アメリカに戻ってメリー・エルキントン(Mary P. ELKINTON)（日本名・万里子）と結婚、同年帰国後は札幌農学校教授、明治三三年後藤新平の台湾総督府に勤め、明治三六年より京都帝国大学法科大学教授兼任、明治三九年より第一高等学校校長・東京帝国大学農科大学教授兼任、明治四二年には東京帝国大学法科大学教授も兼任、大正七年東京女子大学長、大正八年東京帝国大学経済学部教授、同年国際連盟事務局次長兼社会部長となる。日本が国際連盟脱退を表明した昭和八年、カナダで開催された太平洋問題調査会に日本代表団団長として出席した帰路、カナダ西岸ビクトリアで倒れ一〇月一五日当地の病院で死去。享年七一歳。
- (36) 佐藤不二男に関しては、佐藤太郎（聞き手・大藤敏之）「つるや旅館と芥川龍之介Ⅰ・Ⅱ」高原文庫七号（平成四年）二五頁、

- 三二頁、佐藤次郎「つるや旅館と文士」高原文庫二五号（平成二二年）二九頁参照、なお、彼の著した、佐藤不二男『軽井沢物語』（軽井沢書房、昭和五一年）も、資料的価値が高い。
- (37) 『軽井沢町誌・歴史編（近・現代編）』前掲注(6)「年表」六三七頁。
- (38) なお、『かるゐざわ』後掲注(40)九六頁以下、中島松樹『増補新装版』軽井沢避暑地一〇〇年（国書刊行会、平成二二年）一七二―一七三頁に、新旧の別荘番号とその後の別荘所有者の対照表がある。
- (39) 軽井沢町歴史民俗資料館【図表1】⑱ 二階第二展示室に現物が展示されているほか、中島・前掲注(38)一四三頁に写真が掲載されている。
- (40) 佐藤孝一編著『かるゐざわ』（教文館、大正元年……〔復刻版〕国書刊行会、昭和六二年）。
- (41) すぎむら・そじんかん（1872-1945）。明治五年八月二八日和歌山県和歌山市生まれ。本名・広太郎（こうたろう）。英吉利法律学校（現・中央大学）卒業。明治三六年東京朝日新聞社に入社し、大正一二年には「アサヒグラフ」を創刊、また、社内に調査部・記事審査部を設置して新聞社機構の近代化に努めた。昭和二〇年一〇月三日死去。
- (42) もちづき・こたろう（1866-1927）。慶応元年一月一五日現在の山梨県南巨摩郡身延町に生まれる。慶応義塾卒業後、ロンドン大学を経てミドル・テンプルでバリスターを取得し帰国。ジャーナリストとして活動し、衆議院議員を七期務める。昭和二年五月一九日死去。
- (43) おぎさ・ゆきお（1858-1954）。安政五年一月二〇日相模国津久井郡又野村（現・神奈川県相模原市緑区又野）生まれ。慶応義塾に学び、大隈重信・改進黨系のジャーナリストとして活躍。明治二三年第一回衆議院総選挙から、戦後の昭和二七年総選挙まで連続二五回当選、「憲政の神様」と称されたが、昭和二七年第二六回総選挙ではじめて落選し政界を引退、翌昭和二八年一〇月六日死去。享年九五歳。
- (44) 『罌堂全集（第七卷）』（公論社、昭和三〇年）七四二頁以下、『同（第九卷）』二八三頁、『同（第十一卷）』四三九頁。
- (45) 『罌堂全集（第十卷）』（公論社、昭和三〇年）五三四頁「ショーの次に別荘を作ったのはマクネアと云ふ宣教師で、二万坪もあらう、その中に四五軒借家があつて、私も五年ばかり、毎年家を換へて借りて居った」。『軽井沢町誌・歴史編（近・現代編）』前掲注(6)「年表」六四三頁「明治三九年テオドラと結婚後マクネアの別荘を借りる。池の平の別荘（新潟県妙高高原の「楽山荘」に住むようになるまで、三十余年間毎年初夏から初秋、時には晩秋まで軽井沢で暮らし、軽井沢の主といわれた」。
- (46) 相馬雪香（聞き手・大藤敏之）「軽井沢あれこれ」高原文庫一五号（平成二二年）四頁、宮原・前掲注(17)一二六頁以下、桐山秀樹・吉村祐美『軽井沢という聖地』（NTT出版、平成二四年）九〇頁以下。
- (47) 『軽井沢町誌・歴史編（近・現代編）』前掲注(6)「年表」六六五頁。

- (48) すえかわ・ひろし (1892-1977)。京都帝国大学教授・立命館総長、民法学者。明治二五年一月二〇日山口県玖珂郡生まれ。旧制山口中学から、第三高等学校を経て、大正六年京都帝国大学法科大学卒業、大正九年京都帝国大学法学部助教授、大正一一一三年文部省在外研究員として留学、大正一四年教授、昭和八年滝川事件で退官、大阪商科大学講師となり、昭和一五年教授、戦後の昭和二三年より昭和四四年まで立命館総長兼立命館大学学長。滝川事件で辞職した七教授の最後の生き証人であったが、昭和五年二月一三日脳血栓で倒れ、一六日死去。八四歳。
- (49) 末川博『彼の歩んだ道』（岩波新書、昭和四〇年）一八四頁「そんなことで、急に高文の試験を受けることになったのだから、秋の試験まで夏休み中がなければならぬ。それには、涼しいうえに安く暮らせる静かな場所が必要である。さいわいに、東京〔帝国〕大学にいて同じように受験する三高時代からの友だち二人が軽井沢の近く碓氷峠の上で熊野神社の神官さんの家の一室を借りて出かけるという報があったので、彼〔末川〕も、その仲間に入れてもらい、峠の上で勉強することになった」。
- (50) 桐山吉村・前掲注(46)七七頁以下。
- (51) ごとう・しんぺい (1857-1929)。安政四年六月四日仙台藩水沢城下に生まれ、明治六年福島第一洋学校に入学するが、翌七年須賀川医学校に転ずる。明治九年愛知県病院三等医、明治一六年内務省衛生局に入り、明治三三―三六年ドイツ留学、その後、明治三一年台湾總督府民政局長に転じ、同年民政長官。その後、明治三九年には満鉄總裁に転じ、さらに、明治四一年には逓信大臣、大正五年内務大臣兼鉄道院總裁、大正七年外務大臣、大正九年東京市長を経て、大正一二年には再び内務大臣となる。昭和四年岡山への遊説途上の列車内で脳溢血に倒れ四月一三日京都の病院で死去。
- (52) のざわ・げんじろう (1864-)。元治元年五月江戸生まれ。明治一五年慶応義塾を出て貿易商・野沢組を設立。没年は調べきれていないが、戦後の『人事興信録（第一五版）下』（人事興信所、昭和二三年）「ノ三―四」頁には記載がある。
- (53) かわだ・りょうきち (1856-1951)。安政三年三月一四日土佐藩郷士川田小一郎（かわだ・こいちろう (1836-1896)）。後の日本銀行總裁、男爵。明治一〇年イギリスに渡り、グラスゴー大学で船舶機械技術を学ぶ。明治一七年帰国後は三菱製鉄所、日本郵船を経て、明治三〇年横浜船渠会社社長、明治三九年函館船渠会社専務取締役、明治四四年退社後は北海道農業近代化に生涯を捧げ、「男爵芋」の名を残す。昭和二六年二月九日北海道・渡島当別の自宅にて死去。享年九五歳。
- (54) とくがわ・よしひさ (1884-1922)。明治一七年九月二日水戸徳川家・一五代將軍慶喜の七男として静岡に生まれ、明治三五年父の継嗣となる際に初名・久を慶久に改め公爵を襲爵。明治四三年東京帝国大学法科大学政治科卒業後、同年より貴族院議委員。細川護立と仲が良く、撞球・狩猟・乗馬・ゴルフを好んだが、大正一一年一月二二日急死。
- (55) ほそかわ・もりたつ (1883-1970)。明治一六年一〇月二二日熊本藩・細川家第一五代当主・細川護久の四男として東京に生まれる。東京帝国大学中退。大正三年細川家第一六代当主となり侯爵を襲爵、貴族院議員となる。第七九代総理大臣・細川護熙の祖父。

昭和四五年一月一八日死去。

(56) おおくま・しげのぶ(1838-1922)。天保九年二月一六日佐賀藩士の長男として佐賀城下に生まれる。彼が軽井沢に別荘を持つのは、三たび首相を務めた(第三次大隈内閣。大正三年四月一〇日―大正五年一〇月九日)翌年の大正六年―大正一一年一月一〇日胆石症のため八三歳で没する五年前―のことである(東京朝日新聞大正六年八月三日朝刊に「●大隈侯軽井沢行 大隈侯爵は夫人及くま子刀自等同伴二日午前六時半上野駅発汽車にて軽井沢の新別荘に避暑せり」とある)。なお、翌大正七年には軽井沢に早稲田大学野球部のグラウンドが開設された。読売新聞大正七年八月一日朝刊「(運動界) 早大新運動場の開場式/軽井沢の賑ひ/早大対外人戦」には、「早大野球部が予ねて計画せる軽井沢の夏期運動場及び寄宿舎は離山々麓二万坪の地に建設されたるより十日午後之が開場式を挙行せり尚引続き同地滞在在外国人団と早大野球団との野球試合あり何がさて避暑地の事とて内外の家族同伴にて見物に出掛けるもの多く加藤高明子夫妻尾崎行雄氏夫妻島田三郎氏藤波(言忠)子爵約五千に及べり定刻となるや大隈侯出場して荘厳なる始球式を行ひかくて午後三時三十分試合に入れり」とある。このとき大隈は、人力車上から始球を投じたという。

(57) かとう・たかあき(1860-1926)。安政七年一月三日尾張藩代官の二男に生まれる。明治一四年東京大学(旧制)法学部卒業後、三菱入社から外交官に転じ、四度の外務大臣を経て、大正四年貴族院議員、大正五―一五年憲政会総裁時代の大正一三年第二四代内閣総理大臣。なお、大正七年の別荘新築の際には、読売新聞大正七年八月一八日朝刊「斯の国民生活の危機に政党領袖達は今も避暑地に◇軽井沢新別荘の加藤憲政会総裁/政友国民両党思ひくの自我振り閑日月振り」の批判記事もある。

(58) つがる・つぐあきら(1840-1916)。熊本藩第一〇代藩主・細川家第一一代当主・細川斉護の四男、弘前藩第一一代藩主・津軽順承の養子となり、弘前藩第一二代(最後)の当主となる。なお、別荘地を購入して別荘の建築を依頼したのは彼であるが、別荘完成の大正五年七月一九日に死去している。さらに、次代当主・津軽英麿(つがる・ふさまろ(1872-1919)。近衛忠房の二男である彼も、養子として津軽家を継いだ)も、別荘完成の年である大正八年四月五日に急逝し、その後、津軽家は、尾張徳川家の徳川義孝(徳川義恕の二男)が継いだ。

(59) このえ・ふみまろ(1891-1945)。明治二四年一〇月二二日摂家筆頭・近衛家当主・近衛篤磨の長男として東京に生まれる。学習院中等科から第一高等学校を経て東京帝国大学文科哲学科に進むが、大正元年京都帝国大学法科大学に転じ大正六年卒業。三度にわたり内閣を組織して、国家総動員法を施行し、大政翼賛会を設立。しかし対米戦争には消極的で、戦時中は早期終戦に向けて工作を続ける。戦後の東久邇宮内閣の國務大臣となり、憲法改正に意欲を見せるが、A級戦犯に指定されたことが本人には予想外だったようで、昭和二〇年一二月一六日青酸カリを仰いで自殺した。

(60) はとやま・ひでお(1884-1946)。東京大学教授、民法学者。明治二二年二月一日鳩山和夫の二男として東京に生まれる。第一高等学校(英法)から明治四一年東京帝国大学法科大学法律学科(独法)卒業。明治四三年東京帝国大学法科大学助教授とな

り、明治四四年—大正三年欧州留学、大正五年教授、大正六年法学博士となるが、大正一五年退職して弁護士となる。昭和七一一年衆議院議員。脳溢血のため六年間の病臥の後、昭和二年一月二九日、兄・鳩山一郎宅にて死去。享年六二歳。

(61) はら・よしみち (1863-1944)。慶応三年二月一八日須坂藩足軽小頭の長男に生まれる。第一高等中学校から明治二三年帝国大学法科大学法律学科(英法科)首席卒業、農商務省に入省するも、明治二六年に辞官して弁護士に転ずる。昭和二—四年田中義一内閣の司法大臣。その後は昭和五年より昭和一四年まで中央大学学長を務める一方、昭和六年枢密顧問官、昭和一三年枢密院副議長から、昭和一五年より死去まで枢密院議長。昭和一九年八月七日死去。

(62) 東京朝日新聞昭和三年一月七日朝刊「法相カップは鳩山博士に」。

(63) すえひろ・いずたろう (1888-1951)。明治二二年一月三〇日判事(後の大審院部長)末弘徹石の長男として当時の父の赴任地・山口で生まれる。第一高等学校から、明治四五年東京帝国大学法科大学法律学科(独法)卒業後は大学院に進学、大正三年二五歳で東京帝国大学法科大学助教授、大正六年欧米留学、シカゴ大学でケースメソッドを知り、ジュネーブでエールリヒに会う。大正九年帰国して翌大正一〇年三二歳で教授となり、従来のドイツ法継受の民法解釈学を徹底的に攻撃、民法判例研究会を組織する一方、日本初の労働法講義を開始、大正一二年関東大震災の際には東京帝国大学セツルメントを創設。そのエネルギーでアグレッシブな活動は、民法学界の「放火者」(我妻栄「末弘博士と日本の法学」民法学における想出と回顧「法律時報二三卷一—号」末弘徹太郎博士追悼号(昭和二六年)一一二頁)・「学界の火つけ役」(福島正夫「足跡をかえりみて」先輩・同輩・後輩の見た末弘博士の人間像)噴泉「同上三九頁」と評された。戦後の昭和二二年教職追放の指定を受け五七歳で大学を免官。昭和二五年(六一歳)直腸癌と診断され入院。摘出手術を受けるも、翌昭和二六年再発して再入院、死去前日の八月一〇日教職追放を解除され、翌一一日午前四時死去。同日付で東京大学名誉教授を追贈。享年六二歳。妻・冬子は、菊池大麓の三女。菊池の長女・民子は美濃部達吉の妻、二女・千代子は鳩山秀夫の妻であり、三姉妹が一堂に会してそれぞれの夫について語る(聞き手は我妻栄と宮沢俊義)豪華絢爛な座談会の記録として、「(座談会)美濃部・鳩山・末弘三先生を語る(一)」「(二)書齋の窓五九号(昭和三三年)一頁、六〇号一頁がある。

(64) おのづか・きくへい (1871-1944)。明治二年二月二日柏崎県長岡の菜種搾油・質屋業の家の長男に生まれる。第一高等中学校から、明治二八年帝国大学法科大学政治学科首席卒業後は大学院に進み、明治三〇—三四年独仏留学中の明治三三年東京帝国大学助教授、帰朝後の明治三四年教授、大正七年法科大学長(翌八年組織変更で法学部長)、昭和三—九年東京帝国大学総長、昭和一〇年定年退官、名誉教授。昭和一九年一月二六日死去。東京朝日新聞昭和九年八月二五夕刊「カメラの涼風」に軽井沢の別荘の縁側に腰かける和服姿のスナップ写真が掲載されている。

(65) かわい・えいじろう (1891-1944)。明治二四年二月一三日東京・千住の醸造屋の二男に生まれる。東京府立三中、一高から、東

京帝国大学法科大学政治学科卒業後は農商務省に入省。大正七―八年鉱業法法案研究のため米国出張、帰国後辞職し、大正九年東京帝国大学経済学部助教授、大正一―一四年イギリス留学、大正一五年教授、昭和十一年には経済学部長となるも、昭和一三年著書が発禁処分となり、翌昭和一四年平賀爾学により休職。出版法違反事件も昭和一八年大審院で上告棄却となり、翌昭和一九年二月一五日病死。享年五三歳。なお、後記我妻栄の言からすれば、河合が軽井沢に別荘を構えるのは、大正一五年教授昇進後、河合栄治郎『トーマス・ヒル・グリーン思想体系』（日本評論社、昭和五年、上・下巻）が出版されるまでの間と推測される。

(66) 「所収」我妻栄『随想拾遺（下）』（民法と五十年・その三）（有斐閣、昭和五一年）三四九頁。なお、我妻栄「軽井沢」『身边随想―身边雑記(2)』（有斐閣・ジュリスト選書、昭和三八年）一六五頁以下も参照。

(67) 「座談会」人間・末弘を語る』法律時報二三卷一―一號「末弘巖太郎博士追悼号」（昭和二六年）七二―七三頁。

(68) 「軽井沢夏期大学」の詳細については、『軽井沢夏期大学四〇周年記念誌』（軽井沢夏期大学、平成元年）、中島純『後藤新平「学俗接近」論と通俗大学の研究―夏期大学運動の思想と実践』（平成一五年度私学研修福祉会研修成果刊行物、平成一六年）参照。

(69) いちかわ・さんき（1886-1970）。東京帝国大学教授、英語学者。明治一九年二月一八日江戸以来の書家の家の二男に生まれる。東京府立一中、一高を経て、明治四二年東京帝国大学文科言語学科卒業後は大学院に進学、大正元年英語学研究のため英独留学、大正五年帰国後東京帝国大学文科助教授、大正九年教授。妻・晴子（穂積陳重の三女）は、心臓病のため昭和一八年二月五日に死去するが、三喜自身は八四歳まで生きて、昭和四五年三月一七日肺炎と動脈硬化のため死去。

(70) もりと・たつお（1888-1984）。明治二一年二月二三日福山藩士の剣道教師の長男として生まれる。福山中学から一高を経て、大正三年東京帝国大学法科大学経済学科卒業後は助手、大正五年助教授となるも、大正九年「クロボトキンの社会思想の研究」で新聞紙法違反に問われ、失官・入獄（森戸事件）。出獄後は大原社会問題研究所所員となる。戦後日本社会党から衆議院議員、昭和二五年広島大学長、昭和三八年中央教育審議会会長、日本育英会会長。昭和五九年五月二八日がん性腹膜炎のため死去。九五歳。

(71) 中島・前掲注(68)「資料2」軽井沢夏季大学講義および講師一覧」一三四―一三五頁。

(72) 『軽井沢町誌・歴史編（近・現代編）』前掲注(6)二八七頁。なお、その跡地は、現在、日本大学の軽井沢研修所となっている。

(73) このほか、末弘は、改造昭和六年一月号にも「ゴルフ漫談」を掲載している。「所収」末弘巖太郎『法窓漫筆』（日本評論社、昭和八年）三七〇頁以下。一方、我妻は、軽井沢で、末弘の子供を連れてよく釣りに行っていたという。「座談会」美濃部・鳩山・末弘三先生を語る（一）「前掲注(63)・書齋の窓五九号三頁（我妻栄発言）。

(74) あめみや・けいじろう（1846-1911）。弘化三年九月五日甲斐国山梨郡の農家に生まれる。幼名・今朝蔵。経歴の詳細は本文の通

り。明治四四年一月二〇日死去。伝記に、雨宮敬次郎述『過去六十年事蹟』（原安三郎、昭和一四年……〔復刻〕武蔵野社、昭和五一年、〔復刻〕大空社・伝記叢書41、平成一〇年）がある。

(75) 市村きよじ・後掲注(80)四五頁以下。

(76) あめみや・わたる（1869-1918）。明治二年七月二六日甲州の旧家・広瀬家に生まれ、雨宮敬次郎の一人娘・輝子と結婚して婿養子となる（なお、弟の璋八も、雨宮と並ぶ甲州財閥・若尾家の婿養子となっている）。帝国大学卒業後、義父・敬次郎の岩手・仙人鉄山の経営に当たり、明治四四年敬次郎死去の後は全事業を引き継いで、仙人製鉄所・桂川電力・大日本軌道などの社長を務めた。大正七年九月四日死去。

(77) つつみ・やすじろう（1889-1964）。明治二二年三月七日滋賀県生まれ。早稲田大学高等予科から、大正二年早稲田大学政治経済学部政治学科卒業。卒業後の大正四年に学生服姿で大隈重信秘書と称して沓掛村長に面会を求め、村有地の購入を打診。以後の経緯については後述。昭和一三年より終戦まで衆議院議員、昭和二一―二六年公職追放、解除後の昭和二七年から昭和三九年の死去まで衆議院議員、その間の昭和二八―二九年衆議院議長。昭和三九年四月二六日心筋梗塞のため死去。享年七五歳。

(78) 『軽井沢町誌・歴史編（近・現代編）』前掲注(6)「年表」大正六年の項には「12・23 沓掛区、区民総会を開催。沓掛区所有地を堤康次郎に売り渡すことに決定。（ただし、所有権移転は別荘を五〇戸以上建設したときである。二年間経過しても設備投資しない場合は無効等）」とあり（六四五頁）、大正七年の項には「1・4 堤康次郎、沓掛区有地坂下ほか六〇万坪（坂下八万坪・芹ヶ沢約二五万坪・千ヶ滝二四万坪）を三万円と植林組合・青年会へ六、〇〇〇〔円〕で買収、『千ヶ滝遊園地株式会社』を資本金二五万円で設立し開発に着手する」とある（六四五頁）。

(79) わがつま・さかえ（1897-1973）。明治三〇年四月一日山形県米沢生まれ。米沢中学から、大正六年六月第一高等学校一部内類卒業、大正九年七月東京帝国大学法学部法律科独逸法兼修卒業、学生時代より鳩山秀夫の書生として鳩山家に寄宿、大正一〇年三月東京帝国大学助手となり、末弘厳太郎「判例研究会」に参加、大正二二年七月助教、大正二二年六月留学、昭和二年三月教授。昭和三二年三月定年退職。末弘厳太郎の軽井沢の別荘所有を「贅沢」と評するが、自身は、昭和四年の石神井の自宅建築、昭和八年の軽井沢の別荘建築に続き、昭和一三年の湯河原の別荘建築と、戦前から大変な資産家である、その湯河原の別荘で執筆中の昭和四八年一〇月一八日腹痛を訴え近所の開業医の手当を受けたが、病状が悪化し二〇日熱海国立病院に入院するも、翌二一日午後八時三〇分死去。死因は胆嚢炎、享年七六歳。履歴の詳細は、我妻洋二「我妻先生の人と足跡——年齢別業績経歴一覧表」（信山社、平成五年）。

(80) いちむら・けさぞう（1898-1950）。明治三一年一〇月八日長野県北佐久郡軽井沢町「雨宮新田」生まれ。経歴に関しては、妻・きよじの著した記録を二女・信江（三輪寿壯の長男・正弘の妻）と三女・令子（我妻栄の長男・洋の妻）がまとめた、市村きよ

じ『軽井沢——大切な人々』(日経事業出版社、平成一〇年)のほか、加藤恭子Ⅱ我妻令子『メガホンの講義——文化人類学者・我妻洋の戦い』後掲注(90)三八頁以下参照。

(81) 市村きよじ・前掲注(80)二五頁、二六―二七頁、加藤恭子Ⅱ我妻令子・後掲注(90)一一頁。我妻の視点からの記述として、我妻栄「市村今朝蔵君」『身辺随想——身辺雑記(2)』(有斐閣・ジュリスト選書、昭和三八年)一〇二頁以下。

(82) 市村きよじ・前掲注(80)二二―二三頁、加藤恭子Ⅱ我妻令子・後掲注(90)一二頁。

(83) 市村きよじ・前掲注(80)二五頁。

(84) 『我妻栄先生の人と足跡——年齢別業績経歴一覧表』前掲注(79)九頁。一方、我妻・前掲注(81)一〇三頁には、「やがて始まったシカゴ大学のスモール教授の『財産の社会学』の講義にも、二人で聴講生となった」とある。

(85) 『我妻栄先生の人と足跡——年齢別業績経歴一覧表』前掲注(79)九頁。なお、中川善之助によれば、鳩山秀夫の弟子に対する指導方法は、次のようなものであったという。「鳩山先生は……、これを読み、あれを書け、もつとこれを研究せよ、手を引張るようにして指導された。……直弟子の我妻君などは洋服の生地からネクタイの柄まで先生と一緒に行って見立てて下さったようである」。中川善之助「身分法学の父、穂積重遠先生」書齋の窓九号(昭和二九年)五頁。

(86) 市村きよじ・前掲注(80)二五頁。

(87) 『我妻栄先生の人と足跡——年齢別業績経歴一覧表』前掲注(79)九―一一頁。

(88) 朝日新聞昭和二九年七月二一日(人・寸評)法制審議会民法部会長になった我妻栄。なお、朝日新聞昭和三七年八月二四日朝刊(人)臨時司法制度調査会会長に内定した我妻栄も参照。この鳩山の冗句そのものは実話のようで、菊井維大は、我妻の留学からの帰朝歓迎会を兼ねた判例研究会の懇親会の折に「我妻さんが印度洋でコイを釣った話を知った」という。菊井維大「判例研究会の憶い出」書齋の窓一四号(昭和二九年)六頁。

(89) 加藤恭子Ⅱ我妻令子・後掲注(90)二三頁。なお、緑は、平成八年四月二二日九二歳で老衰のため死去した。

(90) 我妻洋(わがつま・ひろし。1927-1985)。社会心理学者・文化人類学者。旧制武蔵高等学校文科乙類卒業、東京大学文学部独文科から心理学科に転じ、昭和二八年卒業後はアメリカに渡り、昭和三二年ミシガン大学修士課程修了、昭和三三年甲南大学助教授、昭和三七年カリフォルニア大学バークレー校研究員から、昭和四二年ピッツバーグ大学教授、昭和四九年カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授、二〇年ぶりに日本定住を決めて、昭和五七年筑波大学教授、昭和五九年東京工業大学教授となるも、食道癌に冒され、昭和六〇年七月二五日虎の門病院で死去。享年五八歳。癌で声が出なくなった後の講義は、メガホンを逆につけて集音器代わりに使い、鬼気迫るものがあつたという。朝日新聞昭和六〇年七月二六日夕刊「(今日の問題)メガホンの講義」。妻・令子が、夫婦の共通の友人と綴った、加藤恭子Ⅱ我妻令子『メガホンの講義——文化人類学者・我妻洋の戦い』(文藝春秋、昭和六二



年)の「あとがき」には、大法学者・我妻栄の「父の影に生きた男」(一〇頁以下)「我妻洋がその短い生涯を通じて真剣に投げかけた幾つかの問いを、挫折した彼に代わって問い続けるべく、この本は書かれた」とある(二八九頁)。

(91) 我妻堯(わがつま・たかし。1930-)。産婦人科医。昭和三〇年東京大学医学部卒業、昭和三二年東京大学助手、昭和三七年より四年間の海外留学の後、愛育病院産婦人科部長を経て、昭和四六年東京大学医学部産婦人科講師から助教授、昭和五一年国立病院医療センター産婦人科医長、昭和六一年国際医療協力部長、平成五年国立国際医療センター設立に伴い国際医療協力局長。平成七年定年退職後は、財団法人・国際協力医学研究振興財団理事長。なお、我妻堯「父・我妻栄」ジュリスト五六三号「我妻栄先生追悼」特集・我妻法学の足跡(昭和四九年)一〇二頁の父親に対する語り口は、兄・洋と大きく異なる。

(92) 『我妻先生の人と足跡——年齢別業績経歴一覧表』前掲注(79)二二頁。

(93) 『軽井沢町誌・民俗編』(軽井沢町誌刊行委員会、平成元年)二四六頁。

(94) 市村きよじ・前掲注(80)七一―七二頁。

(95) 加藤恭子Ⅱ我妻令子・前掲注(90)四一頁。

(96) ろうやま・まさみち(1893-1980)。政治学者・行政学者。明治二八年一月二日新潟県刈川郡鶴川村生まれ(群馬県高崎市生まれとする文献も多いが、誤りである)、高崎中学から、大正六年六月第一高等学校卒業、大正九年七月東京帝国大学法学部政治学科卒業、卒業後直ちに東京帝国大学助手、大正一一年七月助教授、昭和一〇月年教授となるも、経済学部の内紛での河合栄治郎の処分(平賀肅学)に抗議して昭和一四年辞職。思想的には、吉野作造の東大新人会から雑誌「社会思想」同人の河合栄治郎の影響を受け、その後は近衛文麿に接近(以上の点は、市村今朝蔵とよく似ている)、昭和一七年翼賛選挙では翼賛会推薦候補として当選、戦後、公職追放・教職追放となるが、解除後は、昭和二九年よりお茶の水女子大学学長、昭和三七年より国際基督教大学教授を務める。昭和五五年五月一五日死去。享年八四歳。

(97) まつもと・しげはる(1899-1989)。明治三二年一〇月二日大阪堂島生まれ。神戸一中から、大正九年第一高等学校卒業、大正一二年三月東京帝国大学法学部卒業後は大学院に進学し、同年一二月より昭和二年まで欧米留学、帰国後の昭和三年東京帝国大学助手となるが五年に辞職、昭和七年新聞連合社上海支局長として赴任、戦後公職追放となるが、解除後の昭和二七年国際文化会館専務理事、昭和四〇年より平成元年の死去まで理事長。平成元年一月一〇日死去の際には国際文化会館葬が行われた。

(98) 「東京政治経済研究所」と市村今朝蔵については、吉田健二「東京政治経済研究所の設立と事業」大原社会問題研究所雑誌四七九号(平成一〇年)三〇頁、市村きよじ・前掲注(80)四九頁以下参照。

(99) 市村きよじ・前掲注(80)八〇頁。

(100) 加藤恭子Ⅱ我妻令子・前掲注(90)三六一―三七頁、四二頁。

- (101) 加藤恭子Ⅱ我妻令子・前掲注(90)四〇―四一頁。
- (102) 加藤恭子Ⅱ我妻令子・前掲注(90)四三頁。
- (103) 市村きよじ・前掲注(80)八三―八四頁。
- (104) 市村きよじ・前掲注(80)一四一―一四二頁。
- (105) 加藤恭子Ⅱ我妻令子・前掲注(90)一〇五頁。
- (106) これに対して、「市村文庫」や「蠟山文庫」に関しては、専門書が揃っている。「市村今朝蔵文庫(特殊資料目録・軽井沢町立図書館編1)」「軽井沢町立図書館、昭和五七年三月」参照。
- (107) 『軽井沢町誌・歴史編(近・現代編)』前掲注(6)「年表」六六八頁。
- (108) よこた・きさぶろう(1896-1993)。東京大学教授、国際法学者、最高裁判所長官。明治二九年八月六日愛知県江南市の呉服商兼農業の三男に生まれる。八高から、大正一一年東京帝国大学法学部法律学科(独法)卒業後は助手、大正一三年助教、大正一五年―昭和三年欧米留学、昭和五年教授、戦後の昭和二三年法学部長、昭和三二年定年退官、昭和三五―四一年第三代最高裁長官。平成五年二月一七日心不全のため死去。九六歳。
- (109) 横田喜三郎『私の一生』(東京新聞出版局、昭和五一年)一六二―一六三頁。
- (110) たなか・せいじ(1898-1994)。一橋大学教授、商法学者。東京帝国大学文学部教授・田中稻城の二男として明治三〇年五月三〇日東京に生まれる。一高から、大正一〇年東京帝国大学法学部卒業、大正一三年東京商科大学助教、昭和八年教授、戦後の昭和二六―三〇年一橋大学学長、昭和三六年定年退官後は青山学院大学教授、昭和四八年亜細亜大学教授。平成六年一月二三日老衰のため自宅にて死去。九七歳。葬儀は日本基督教団吉祥寺教会で行われた。別荘滞在時にも軽井沢高原教会の礼拝に赴いており、プロテスタントであったことも、星野温泉を選んだ理由の一つになっている。
- (111) くれ・しげいち(1897-1977)。東京大学・名古屋大学教授(ギリシア・ローマ文学)。箕作阮甫の曾孫・呉黄石の孫・呉秀三の長男として明治三〇年一月六日東京に生まれる。第一高等学校医学科から大正八年東京帝国大学医学部に進むが、大正一一年文学部に転じ、大正一四年卒業。昭和五二年一月二八日死去。
- (112) 田中誠二『軽井沢の思い出(一)』(主として学生時代の)「田中誠二『一筋の道——一法学者の随想』(勁草書房、昭和四一年)二八二頁。
- (113) 田中・前掲注(112)二八三頁。
- (114) 田中・前掲注(112)二八四頁。
- (115) ありしま・たけお(1878-1923)。明治一一年三月四日大蔵官僚・有島武の長男として東京に生まれる。弟に有島生馬、里見諄

妹・愛は三笠ホテル経営者の山本直良の妻となる。学習院中等科から、遠縁の新渡戸稲造を頼って札幌農学校に入学、明治三四年卒業後は、明治三六年米國留学、明治四〇年帰国後東北帝国大学農科大学講師、弟・生馬を通じて志賀直哉・武者小路実篤らを知り、明治四三年「白樺」創刊。大正期に入ると、大学で主導する社会科学（主義）研究会が問題視されて大正四年休職、大正五年妻・安子の死別と不幸が続く。軽井沢へは、安子の死去した大正五年以降、大正一〇年を除いて毎年訪れており、大正八年・大正一一年には軽井沢夏期大学での講演も行っている、大正一一年ニセコの有島農場を小作人に開放した後、翌一二年に知り合った婦人公論編集記者・波多野秋子に恋愛感情を抱くが、秋子の夫より脅迫を受け、六月九日軽井沢の別荘・浄月庵で心中。享年四五歳。

(116) 田中・前掲注(112)二八四頁。

(117) 田中誠二「軽井沢の思い出(二)（主として教授時代の）」前掲注(112)二八五頁。

(118) 田中・前掲注(117)二八五頁。

(119) 田中・前掲注(117)二八五―二八六頁。

(120) 田中誠二「星野山荘の生活」前掲注(112)二六六頁。

(121) うちむら・かんぞう(1901-1930)。万延二年二月一三日高崎藩江戸詰藩士の長男として江戸に生まれる。明治一四年札幌農学校卒業（新渡戸稲造と同期の第二期生）、開拓使に務めた後、農商務省を経て、明治一七―二一年米國留学、明治二三年第一高等中学校嘱託教員となるが、翌二四年不敬事件で依願免職。大正一〇年にはじめて軽井沢・星野温泉を訪れて以降、同地を愛し、たびたび来訪した。小倉正子「内村鑑三と星野」前掲注(7)二〇頁、星野嘉助「内村鑑三と星野温泉」前掲注(7)三三頁。昭和五年一月初旬心臓病に尿毒症を併発して重態となり、三月二八日午前八時五一分死去。

(122) 田中・前掲注(120)二八五頁。「この昭和八年の時は、旧軽井沢の野沢マーケット（野沢源次郎の「野沢原」の中心）の近傍の小別荘であって、家は小さかったが、庭は相当あったし、また、近くに別荘は少なく、閑静なところであった。この年の軽井沢滞在の主な目的は、やはり、講義案の準備と留学中の仕事をまとめることにあつた。それでそのための努力はできるかぎりした。しかし他方において、この頃は、健康の状態は、完全に良好であつて、東京で使用していた自転車をもそのまま軽井沢に持参して、高原の方々を自転車で乗り廻っていたし、またゴルフを始めた頃で野沢マーケットの近傍の別荘から旧ゴルフ場まで自転車で行来して、旧ゴルフ場でレッスンをとるばかりでなく、その頃九ホールしかなかったリンクを何度も廻った」。

(123) 桐山秀樹「軽井沢の宿について——万平ホテル・つるや・星野リゾート」前掲注(7)三九頁以下、桐山吉村・前掲注(46)一―六頁以下。

(124) 田中誠二「軽井沢と法学者その他の社会科学者」前掲注(112)二八八頁以下。

(125) ふなはし・じゅんいち(1900-1996)。九州大学教授、民法学者。明治三三年五月三十一日東京四谷生まれ。神戸一中から第一高

等学校を経て、大正一三年東京帝国大学法学部法律学科（英法科）卒業、大正一四年九州帝国大学副手となり、大正一五年より昭和四年まで文部省在外研究員として留学、帰国後九州帝国大学助教授、昭和五年教授、戦後の昭和二四年法学部長。昭和三九年定年退官後は法政大学教授。平成八年一月二日肺炎のため死去。九六歳。

(126) うちやま・しょうぞう (1920-2002)。法政大学教授、民法学者。大正九年七月五日新潟県柏崎生まれ。東京府立六中（現・新宿高校）から、昭和二二年東京帝国大学法学部政治学科卒業。昭和二四年法政大学法学部助教授、昭和三四年教授、昭和四五年法学部長、平成元年札幌大学に開設された法学部の初代学部長、平成三年札幌大学学長、師・川島武宜の旧蔵書を札幌大学に收藏させる（札幌大学「川島文庫」）。平成一四年一二月一四日呼吸不全で死去。八二歳。

(127) 内山尚三「法政大学と舟橋先生」『舟橋諄一先生を偲ぶ——先生とのあの時このとき』（九州大学法曹会・九州大学法学部東京同窓会、平成九年）一七頁。なお、舟橋が法政大学教授に就任した経緯は、「先生は、九大を退官された後は東京で弁護士を開業する予定を固められたのですが、そのことを耳にした川島武宜先生が法政の教授になって頂くよう強引に口説かれて承知して頂いたとのことです」というものである。

(128) まつむろ・いたす (1852-1931)。嘉永五年一月二日小倉藩士の長男として豊前国に生まれる。司法省法学校正則科第二期生（梅謙次郎らと同期）。明治三九年検事総長、大正元年第三次桂太郎内閣・大正五年寺内正毅の司法大臣、その後大正九年より貴族院議員、大正一三年より枢密顧問官。その間の大正二年より死去に至るまで二〇年にわたって法政大学学長を務める。昭和六年二月一六日枢密院での選挙法改正法律案審査委員会の終了直後脳溢血で倒れ死去。法政大学は二〇日学葬を挙行了した。

(129) のがみ・とよいちろう (1883-1950)。法政大学教授、英文学者・能学研究者。明治一六年九月一四日大分県臼杵生まれ、臼杵中学から、第一高等学校を経て、明治四一年東京帝国大学文学部英文科卒業。終戦直後の昭和二一年法政大学総長となり大学復興に当たるが、在任中の昭和二五年二月二三日脳出血により死去。六七歳。

(130) 詳細は、『北軽井沢大学村——開設三十年記念』（大学村組合理事会、昭和三五年）、『大学村五十年誌』（北軽井沢大学村組合事務所、昭和五五年）、『大学村七十年誌』（北軽井沢大学村組合、平成一一年）参照。

【追記】 本稿執筆に際しては、軽井沢町立離山図書館、軽井沢町歴史民俗資料館、軽井沢町観光経済課より種々のご教

示を頂戴した。記して謝意を表したい。